

新白山文学

特別増刊号

東洋大学文藝サークル“綴”

目次

かくれんぼ

星井靄

4

CROSS WORLD

草津出

11

古典に溶ける

草津出

19

無題、まじめなひとたち

草津出

23

チープ・ダイアリー

八名井明

27

鮑の話

星井靄

33

マルティン・ハイデガー「ヘーベル——家の友」

伊番鑄市||訳

35

リレー小説 一日目

二日目

50 45

詩

草津出

林羽夢

rico

55
56

かくれんぼ

(連載第一回)

星井 靄

人文学の廃れつつある世にあつて

文藝の袖へと私を導いてくれたが故に

宮澤賢治に捧ぐ

1

味爽時の都市、流れる熱い空気を掻き混ぜて、蛇のような車列は通り過ぎてゆく。

その流れを横目で見ている少女はバスの中、冷房装置の吐き出す空気を疎んじて、送風口を窓の方へ向けた。好く晴れた青い空に入道雲は九つばかり湧き上がり、擦れ違ふ車窓に白い歪な姿を映し取られている。信号の瞬きはほとんど赤と緑を繰り返し、退屈な車の流れは楽譜の自動演奏を思わせた。却つて強調される黄色信号の不在を思いながら視線を漂わせれば、硝子輝く高層建築の根元に黒ずんだ水溜りが風に揺られているのが漫ろに見留められる。夕立の痕跡。昨日の瑕疵。少女は鞆の中を手探り、折畳み傘の布地を撫でた。想起されるのはアイロン台、だけどそんなことを何処で識つたのだろうか、少女は頭を窓硝子に凭せて物思いに耽る。激しく響くセミの声、アスファルトに落とされる木木の蔭、懐かしい気のある家の匂い、引戸の乾いた音、上がり框の感触、そして祖母の声。跳ね上がったのは汚濁の水溜りだろうか。行き摺りの歩行者が避けられずに、飛沫を被っていた。明滅する街は後退し、少女を徐かに街外れへと連れて行く。

車内には少なく、二つの地域間の人口にどれ程の差が質と量の両方に関して存在するのかを考え始めるには打って付けの状況だった。少女は水筒を取り出し、お茶を飲んでいられる。熱くもなければ冷たくもなく、口に親しいぬるい麦茶だった。母親が慌てて煮出したせいでそうなったのだが、あんまり冷たくても熱くても厭でしょうと決めてごまかしてしまつたのだ。別に好きでもないんだけど。少女は小さな手に魔法瓶を握つてつまらなそうに窓の外を見ていた。空色の窓硝子には少女の表情が透き通つて映っているが、眼は飛んで行く街並を瞞めていた。

バスは幾つかの停車場を通過した。目的のバス停が近付いてくると少女はちらちらと降車ボタンに眼を向け始める。それから車内を見渡しして他の客の様子を窺つた。一番奥に座っているのは少女自身。その二つ前の席には寝穢く口を開けて軒をかいている会社員が居り、他には優先席に小柄な老婆、その対面に携帯電話の画面を眺める主婦、すぐ側に老爺、そして運転席の後ろの席には落ち着きのない男が居た。走行音に混じつて軒が単調に響き渡っている。窓外の風景は耳遠い。運転手は鼻毛を抜くのに夢中になっているが、その様子はルームミラー越しにはつきりと少女には見て取れた。次のバス停では中学生と思しき男子が乗つて来て前方の座席へ腰掛けた。その次の駅名が案内されると、すかさず老爺が降車ボタンを押した。次、停まります。少女が降りるつもりでいたバス停だった。ボタンを押しそこねたことに何だか損をした気持ちになつて、少女は荷物を纏めた。

簡素な造りの停車場は神社の裏手にあつた。小高い丘の上に樹樹に囲まれた社殿が見える。バス停があるのは麓に延がる原っぱの脇だ。まだ太陽は低く、影は長く伸びている。少女は料金箱に小銭を容れ、バスを跳び降りた。水筒がカラカラ鳴る。先に降りた老爺は笑みを浮かべながらこちらを見ていた。ちよつと老爺の背から太陽の光が射しており、少女はそちらを見られなかった。老爺はすぐに背を向け歩き出した。少女は何となくその姿をしばらく眺めていた。バスが黴い煙を吐き出して走り去っていく。少女は独りになると、近くにあつた自動販売機に近寄つた。赤い機体に飲料品が三段並んでいる。緑茶に紅茶、コーヒ、カフェオレ、コーラ、サイダー、フルーツジュース、野菜ジュース、エナジードリンク、スポーツドリンク、ミネラルウォーター、アカミカンス、エリトリット、ヴィタリウム、エリトリートル、レジュレクティクス等等。少女は鞆の中から財布を取り出し、小銭を容れた。どれにしようかな。お茶でいいだろうと決めると、背伸びをしてボタンを押した。そして、先程車内でボタンを取り出し口に手を挿し入れると、冷たいものが指先に触れた。少女はそれを掴んで持ち上げた。取り出して見て驚いた。お茶ではなかった。筆記体の英字で書かれた商品名は辛うじて頭文字のV一字だけが読めた。少女は自動販売機を見上げた。反射する光が白く一条の線を描いている。

少女はひとまず鞆の中にその缶ジュースを仕舞うと原っぱの方へ歩き出した。神社を突っ切ると祖母の家まで近道になるのだ。草原の中を歩く。地面は幾分湿っていた。草葉が足に触れる。それにワンピースが少し濡れたようだった。しかし、少女は構わずにそのまま歩き続けた。神社の鳥居は反対側だ。本殿、と言っても小さなものだが、その社の裏には小さな祠があった。覗き込むと随分むかしに置かれたであろう供物がそのままになっている。少女は閃いたとばかりに鞆から缶ジュースを取り出し、祠に置いた。それから手を合わせようとして、叩いた方が好いのかどうか逡巡し、結局考えあぐねて両方とも実行した。一挙両得かな。一挙両得だよ。違いかも。清しく風が吹く。スギとマツが植わった境内にざわめきが起る。少女は翻る髪を手で抑え再び歩き始めた。

苔むした地面は蔭で蔽われている。涼やかな風、心地良い木洩れ陽。少女は上機嫌だ。鳥居の先には急勾配の階段がある。ちょうど灰色をした鳥居まで数歩のところまで来た時だった。砂の掛かった石段を駆け上がってくる音が聞こえた。少女は些し身構えて、後ずさり、立ち尽くす。ざらざら靴底の擦れる音。息を切らした声が風の中をひそやかながら伝って来る。少年がひとり、階段を上りきって、目の前に立っていた。

2

少年はCと謂った。少女も名前を名乗った。二人は、それ以上の自己紹介もろくにしないまま、石段に腰を下ろしていた。ひんやりとした感触が伝わってくる。二人の間を風が吹き抜ける。まだ碧い落葉が飛ばされていく。少女はそれをじっと瞞めていた。階段の下の方に葡萄棚が見えた。少女は訊ねる。少年は答える。あそこは美味しくないよ。そっか。じゃあ、と言いながら腰を上げようとしていると、少年が言う。あの、これからみんなでかくれんぼするんだけど、よかったら。少女は断ろうとした。しかし、まるで最初からそうする予定だったかのように感じられてならなかった。いいよ。どうせすぐ終わるだろうし。少女は少年と一緒に社の方へ引き返した。

鬼を決めるから。少年と少女は二人、じゃんけんをした。少女がグーを出して負け。ゆっくりと開いた手には汗が滲んでいた。昨日の続きだから。少年ははにかみな

がら言った。何だっけいつも昨日の続きだから。直に他の子供達も来るだろうからもう数え始めて構わないと少年は告げ、裏手の方へ走って行った。みんな裏から来るから。一言だけを言い残して、どたばた音を立てながら縁側の上を駆けて行った。

少女は言われた通り、数を数え始めた。木で出来た階段は白く乾いていた。一、二、三とゆっくり小さく声に出していく。数字を順順に発音しながら、知りもしない子供をどうやって見つけ出せばいいのだろうか、それに何人いるのだろうか、そもそもこゝうやって鬼の役を押し付けられてしまつて祖母の家に訪うのを後回しにしてもいいのだろうか、今は何時だろうか、次から次へと疑問が湧いてくるのだ。何秒数えたらいいいのかな。向こうを驟る駆動音が耳に遠く感じられる。風の鳴らした葉音は誰かの足音だろうか。ひよっとすると誰も居ないのかもしれない。あの男の子も。少女はぎよっとして顔を上げた。汗ばんでいる。口からひとりで数字がこぼれてくる。通り抜ける風が心地よく、腕をさすった。そして辺りを見回した。鳥居の下からこちらまで続く石畳の途中に白い物が見えた。腕に押さえつけられていた眼が焦点を合わせるとまじまじと掛かったが、その白い物が紙コップであることは眼の調節を待たずして見て取れた。少女は立ち上がり、紙コップを拾いに行った。誰かが落としていったのだろうか。使われた形跡は無い。鳥居の向こうを覗き込む。誰も居ない。石段の上に木枝やら青葉やらが散らかっているだけだった。

少女は紙コップを手を持ったまま、境内を散策した。鳥居の脇には、石碑が建っており、そこには寄進者の名前や建替を行った年号が刻まれている。

勸請 創建 年月不詳

第一回再建 天正五年丑ノ年

第二回再建 萬治四年丑ノ年

第三回再建 享保十年巳ノ年

第四回再建 安永元年辰ノ年

第五回再建 文化五年辰ノ年

第六回再建 安政六年未ノ年

第七回再建 明治三十九年

文字列は三段に分けられて縦書で刻印されており、三段目に印された第七回の左隣は空行になっていた。この空白を埋めるのはいつになるのだろう。それまでにあの階段下の葡萄畑での収穫を何度迎えるのだろうか。幾度も実を摘んで、それでようやくここに字が刻み込まれることになるのだろうか。少女は空白の呼び掛けに耳を貸して、そこに、些しの間、佇んでいた。

境内の崖際に沿って、寄進者の名前が書かれた木簡と石碑が並んでいた。筆で書かれた名前はよく見れば、個人の名前だけでなく、商店や会社、組合の名前も散見された。石碑の中にはうつすらと苔に蔽われている古めかしいものもあり、名前もそれに応じて古式ゆかしい名前が並んでいた。再建の度にこうやって名前が連なっていくのだろう。足を止めたまま、少女はそれらの署名を眺めていた。そこには少女と同じ苗字も見つかり、先祖の名じやあるまいかと惟つたりして、手の中で紙コップの弾力を確かめる。

少女はやはり気になって葡萄棚を間近に見ようと石段を下る。葡萄は棚一面に蔓を延ばしていた。よく見れば、小さく実が付いている。きつと山葡萄の一種なのだろう。食べられるものではなさそうだ。それでも何となく実をもちで、そつと紙コップの中に容れた。小指の爪先程の粒が白い紙筒の中に収まっている。おばあちゃんに見せてあげよう。少女は再び階段を上がろうと向きを変えた。

「おっと」

少女は誰かに打突かりそうになり、慌てて身体を制動する。眼の前には芥子色の半袖シャツ、ボタンも芥子色だ。

「ごめんごめん」その身体はややのけぞる。「びっくりさせたかな」

声の主を見上げれば、中年の男だ。痩せた顔は優しく微笑んでいる。

「あ」何かに気付いたように声を上げる。「お嬢ちゃんもそれに興味あるのかな」

男は紙コップを指差している。少女は何となく頷いた。男は趣味で植物研究をしていると謂う。ひよつとすると植物学者なのかもしれない。肩から提げた鞆から採集用の道具を取り出し、葡萄の葉や実、蔓を切り取り袋に容れていく。

「おじさんはね」小さな葡萄の実を瞞めながら、半ば独り言のように言う。「草木の精霊なんだよ」

少女は冷ややかに笑ってしまっていることを自覚しながら、適当にお愛想を口にす。男はそれを気に留めずに相変わらず採集に熱中していた。慥かにチューリップ帽を冠っているが、関係はないだろう。

「この宇宙に不毛なものなんて一つとして無い」男は真剣な表情で葡萄の小さな実を観察している。「よく耕されているね」

少女は雑草の生い茂る地面へ視線を落とした。そうは思えないんだけど。男は「自然の自然」と呟くと、しばらくの間、黙っていた。それから急に、

「あつと、採り過ぎたかな」周囲をきよろきよろと見回して道具を鞆に仕舞う。「また怒られるからね」

ぼそぼそと何事か呟いていた男はいそいそと採集を終えてしまい、それじゃあまたね、と手を振り去っていった。それを見送りながら、少女は、はつとして、石段を駆け上がった。もう今頃、あの少年の話が本当なら、他の子供が来ているだろう。少女は再び鳥居をくぐり、境内に踏み込む。石畳の上を小走りに駆ける。その時、風が吹き、一枚の紙が運ばれて来た。その紙は少女の身体に貼り付いて、着地した。そこには、きつと少女宛にだろう、簡単な伝言が書き付けられていた。

女の子へ

みんなであわせて六人います。

みんなかくれています。

みんなより

水色の便箋には可愛らしい動物の画が印刷されており、きつと六人の内の誰か女の子が持っていたものだろうことが読み取れた。だが、そこに書かれた字はぎこちなく、まるで木の枝を並べたような下手な線で構成されており、男の子が書いたのだろうと思われる。よくミミズの這ったような、などと云うが、その字はモグラの掘ったよう

な、と言いたくなる字だった。少女は簡素な手紙の隅にモグラの画を見つけて、微笑んだ。

突然、轟音が鳴り響いた。少女が手紙を眺めている時だった。顔を上げ、目を見開いた。小さな本殿の木戸が砕け散り、何か白い物が飛び出して来る。少女は驚きの声すら呑み込み、苔の繁茂する手水舎の方へ飛び退いた。濁った玉砂利の上を掌が滑っていく。紙コップが転がり、葡萄の実が砂利の上に落ちる。少女は磯辺で転んだ時の感触を思い起こしていた。あの時程は痛くない。潮水が手に滲みる痛み。少女は眼を閉じたまま玉砂利の上で丸まっていた。

しかし、背中を揺らすように生暖かい風が吹き中たり、こわごわと臉を開き始めた。強烈な排気の音。機関車の音だ。ぼやけたままの視覚像に二重写しになった機関車の想像。少女は慌てて振り向いた。想像は消える。だが、今、眼の前には確かに客車を連ねた機関車が現れている。それも掌を擦りむいた玉砂利の白色より、数段、白かった。灰色の煙を吹き上げながら、少女の眼前に停車していた。

黝味を帯びた白煙と蒸気混じりの砂埃の向こう側には見える白い車体は暗い森の中にあっても眩しかった。金色の車輪がゆつくりと回転を止めていく。風は落葉を吹き混ぜて通り過ぎていった。少女は呆気にとられ、夏の日の蔭溜まりに沈んでしまう。

蒸気が一層強く吐き出され、少女は眼を瞑る。少女は手に力を込めた。しかし、小さな手に握られた手紙は指の間をすり抜け、煙のたなびきへと吸い寄せられて行った。ふためて砂利を蹴り上げるようにして身体を立ち上げる。手紙。少女は姿勢の調べられぬ内に、手を伸ばし後を追おうとする。玉砂利が鳴る。少女は姿勢を崩し、当惑の海の中に再び沈められそうになる。

「間もなく発車致しまアす」

いたずらっぽい声が出た。少女は衝撃に備えて、身体を固くしていた。けれども、地面に打ち付けられることはなかった。いつの間にか、少女には全く判らない間に、少女は柔らかい赤い座席に顔を埋め、床に座り込んでいた。あれ、どうして。少女が不思議に思っていると、誰かが肩を叩いた。

「ねえ」

少女はびっくりして身を縮めて、振り返った。向い合いに設えられた座席の反対側に居たのは、あの植物採集の男だった。

「あ、やつぱり」男は笑みを浮かべながら帽子を脱いだ。「起こしたら悪いかなと思つて、しばらく見守ってたんだけどさ」

汽笛が鳴った。少女は椅子に腰掛け、男の話を聞き流しながら、窓の外を見た。座っている場合じゃない。少女は飛び上がった。

「危ないよ」

男がそう呼び掛けた時、車両は重重しく動き出した。でも、少女は言いきまに、窓の外を見た。神社の境内だ。手水鉢の辺りには、少女が転んだ形跡が残っている。砂利が散らかっている。だが紙コップは見当たらない。窓辺に駆け寄る。ゆつくりと動き始めた景色に見えたのは、手水鉢の奥の石碑に埋め込まれている金属板だった。鉄道駅で目にするような駅名と行先が書かれた案内標だ。赤錆の目立つ看板からは「神社前」と「御城前」の二つだけが辛うじて読み取れた。

「大丈夫だよ」男は柔和な表情を造っている。「それにほら、これ」

男は鞆から少し汚れた紙コップを取り出し、窓の棧のところに置いた。置きざまにコップを揺すり、可愛らしい音を立てた。少女は筒の中を覗き込んで、男の顔を見る。微笑んでいた。

「それと」男は一変して神妙な表情になる。「君は今、かくれんぼをして遊んでいるね」少女は頷き、紙コップを両手で包んだ。

「しかも鬼は君だ。相手はぼくの知合いの子供達だね」男は鞆に手を入れる。「実は、ぼくも鬼なんだよ。さつき頼まれちゃってね」

少女は黙りこくり、男は鞆の中から何かを取り出した。よく見れば、それは淡い黄色の一枚の切符だった。

「それで」男は首を後ろへ仰け反らせる、老眼なのだろう。「君はささっと六人見つけて、葆子さんのそこへ行きたい、そうだろう」

少女は、上目遣いに男を見た。祖母の知合いなのだろうか。

「まあ、お茶でも飲んでゆつくりしたらいいさ」男は切符をシャツの胸ポケットに移し、また鞆に手を突っ込む。「フェスティーナ・レーンテだよ。フェスティーナ・レーンテ」

男はふふんと笑いながら、水筒を取り出した。少女は話を切り出せずに、つい自らも水筒を鞆の中から探り出す。

「おっと。ぼくが注いであげるよ」男は水筒を傾ける。「蒐集の蒐の字、つて言っても判らないと思うけど、その蒐の字、草冠に鬼つて書くんだよねえ。今のぼくにぴったりだと思わないかな」

注がれるお茶が床の上に溢れた。汽車が隧道に入りこんだせいで、手許が狂ったのだろう。車内には照明が無く、全体真っ暗だ。少女はやや怯え、お茶を一口含む。懐かしい味がする。人心地ついた頃合いに、木製の古めかしい扉が開かれる音がして、

「改札失礼しまアす」

発車時の声と同じ調子だった。暗闇の中に足音が聞こえてくる。猛猛しい走行音の中に明瞭に響いていた。そして、鉄を鳴らす音。車掌の気配がすぐそこまで来た時、汽車は暗がりを脱けた。再び、轟音が前景に立つ。少女は白い光を横顔に浴びながら、混乱していた。目の席に居たはずの男が居なくなっていたのだ。

後架に下がったのだろうか、荷物毎消えていた。残されたのは少女の手の中の茶の一杯だった。風景は一面に広がる田園の緑色だった。碧い稲穂には既に実りが訪れている。改札も来ない。車掌の姿も見えない。

少女はお茶を持ったまま、窓の外を見ていたが、いつまで経つてもありふれた圃場の光景が飛び込んで来るだけだった。緑に蔽われた大地が滑ってゆく。それを見ながら、少女はお茶を啜る。

そうやって、たまに見える踏切、交差する道路には車一台停まっていないうたただだ寂寥さを漂わせる踏切を三つか四つ通過した頃に、車内に停車の案内が放送された。少女の退屈を湛える心の内に車内放送が忍び込んでくる。

次は、御城前、御城前。

少女は窓の外に目を向けたまま不安に駆られる心を落ち着かせようと何も考えないようにしていた。駅が近付いてきたのだろう、それらしい設備が辺りに散らばって

るのが見えた。柵、信号、標識、転轍器、転車台、黒と黄の縞模様や赤と緑の明滅、橙色の照射。終着駅ではなさそうだが、きつと大きな駅なのだろう。車庫のような建物もあった。線路の脇には碧碧と叢が生い茂り、風に揺られている。周囲は見渡す限り田圃と森林だった。遠くには山並みが見える。うっすらと青い山の端は背景に入道雲を従えていた。じつと瞠めれば、雲の輪郭は蠕いてその形状を変化させている。そよぐ叢草と浮かぶ叢雲の間には確やかな共通点が見出された。少女は漠然とそんなことを考えている。

汽車は一番線に入線すると、大きな音を轟かせ、停車した。それから、扉が解錠される音が騒音の中を響き渡った。しかし、降車する人は見当たらなかった。少女は窓硝子に額を寄せ、停車場を眺めた。すると、ずつと向こうの方に人が二人立っているのが見えた。何かを話し合っているのか、揉めているようだった。少女が居るのは一番先頭の客車だ。二人が居るのは牽引車よりも先の方だった。屋根の無い停車場の突端の辺り、日光に刺され、浅黒い肌の男が二人、汽車の騒擾の向こうで、また別の喧嘩に包まれていた。

二人の年齢にはかなりの隔たりがあるように見え、親子のようにも思える。年嵩の方が大事そうに風呂敷包みを抱えている。年少の方は相手を説得するように、半ば哀願するように身振り手振りを威勢よくして何かを叫んでいるようだった。少女の耳にはかすかに「諦めて」という言葉が聞こえる。数分経過して、諍う二人を他所に笛が鳴らされたのだが、二人はそれを聞いてようやく車両の方へ歩き出した。年少者が先を歩き、年長者がそれに続く。息子と思しき若者が後ろを振り返り振り返り何かを叫ぶ。表情は焦燥と怒気に覆われている。それを見て、少女はさつと窓から身を退いた。

二人は客車に乗り込むと、少女の斜向かいの席に腰を下ろした。二人共表情を陰しくして腕を組み黙り込んでいた。田舎なら何処にでも居そうな素朴な格好をしている。緑色のポロシャツが父親で、白いTシャツが息子だ。父親の傍らに包みを置かれている。舌打と溜息が衝突する。少女は気不味そうに肩をすぼめ、残り少なくなつたお茶の中に黒く映る自分の顔を覗き込む。二人が乗り込んですぐ、車内の沈黙を抹消するように、機関車は驟り出した。車内はまた走行音でいっぱいになった。

駅が窓の外を吹き飛ばされて行った直後のことだった。叫び声が聞こえた。汽笛に掻き消されて判然としなかったが、慥かに何か聴覚を刺激した。少女は椅子の背凭れから顔を半分出して、斜向かいの席を窺った。見れば、あの親子が立ち上がった揉み合っている。父親が風呂敷を解こうとしており、それを息子が掴みかかつて制止する。息子の腕を振りほどき、父親が包みを開ける。中には桐箱。手早く蓋を開ける。息子は父親の腰に飛び掛かり、平衡を失した父親の手許から箱が転がり落ちた。中身は壺だった。今や床に落下した衝撃で砕けてしまった。父親と息子は先を争って破片へと手を突っ込んだ。

「改札失礼致しまアす」

車掌の声がした瞬間、汽車の車内は光を失った。二人の切れ切れの呼吸音の裏を打つように改札鉄の噛み合う音がする。少女には何かがかち合う音がもう一つ聞こえた。あの親子の父親がライターを持っていたのだった。ライターから上がる炎が親子を照らす。それと同時に父親の血に塗れた他方の手に何かが握られているのが見えた。筒状の物から伸びる紐のようなもの。爆薬だった。息子は躍起になってその手に縋り付く。しかし蹴飛ばされ暗闇の中に消えた。そして、陶器の砕ける音。

「ちよっと」

少女の背後から声呼び掛ける。改札です、そう言った。少女は切符なんて持っていない。ばたばたと靴やら服やらを叩いてみる。それどころじゃない。少女は姿の見えない車掌の注意を促そうと、後部座席を振り返った。その瞬間にライターが椅子の上に向かって落ち始めていた。ひらめく炎に照らされて、息子が刃物を振り回しているのが見えた。ライターの火は消え、鈍い音だけが闇の中を伝って来た。

「ちよっと」

ちよっと、と呼び掛ける声の方を少女は振り返ろうとする、視線を転換させようとする眼の端の方で爆炎が迫ってくるのが見える、そして振り返った先にその熱い光に照らされて誰かの顔が視野の中に浮かび上がってくる、それは子供の顔だった。

「数えてる間に寝てちゃだめじゃん」

Cの顔だった。そして、彼の声だった。少女は木製の階段に座っていた。額には汗が滲む。顔を上げると、風が身体を撫でる。

「みんな隠れてるから」

それじゃあ、と簡単に言う少年は縁側を走って行こうとする。少女は、見つけたと呼び掛けながら少年の背を指でさした。

「ええっ」少年は意外そうな表情をしている。「それってありなの」

ありだよ。少女は笑いながら立ち上がった。足下には葡萄の実の入った白い紙コップが置かれている。コップの下には水色の便箋が敷かれている。どちらも少し汚れていた。

(つづく。全三回予定)



CROSS World

草津出

「翼先輩は、パラレルワールドがあると思いますか？」

先ほどまでずっと本に目を落としていた黛くんが、突然顔を上げたのかと思うと、開口一番にこう言った。

私には何が言いたいのかサッパリだった。パラレルワールド？ いきなり何を言っているんだろう。そんなこと突然聞かれたって分かるはずはないし、答えられるはずもない。

そもそもこの問いは私に向かつて投げかけられたものだろうか。そう思っただけは辺りを見回した。だけどこの部屋には今、私と黛くんしかいないのだ。つまり、黛くんが言ったのが独り言だったのではないのだとすると、それは間違いなく私に向かつて言った言葉であるということになる。

私は何と答えていいのか、かなり困り果てた。だいたい私は黛くんとはサークルが同じというだけで、ほとんど話したことはないのだ。他の皆が談笑している中で、黛くんはいつもひとり本を読んでいる。まあこのサークル自体、決まった目的があるわけではないのだから、黛くんの過ごし方が決って間違っているというわけではないのだけれど。

先ほどこの部屋に来た時の、なんとなく嫌な予感がしたのはこれだったのか、と私は思った。部屋に黛くんしかいないと分かった時は、正直かなり気まずかった。なにしろ彼の扱い方に関しては、まだサークルメンバーの誰ひとりとして、把握しきれていなかったのだから。だけど一度ドアを開けてしまった以上、帰るわけにもいかない。黛くんに形だけの挨拶を交わしてからパイプ椅子に腰掛け、今に至る。

かく言う私も、黛くんへの接し方が全くと言っていいほど分からなかった。それもそうだ。いつも本ばかり読んでいるため、接する機会がほとんどないのだ。それをクールな性格と呼べば聞こえはいいかもしれないけれど、それは比較的和を求めたがる傾向にあるこのサークルにおいて、完全にマイナスだった。

けど、声を掛けられたからには答えない訳にはいかない。もし黛くんがなかなかサークルに馴染めなくて、そしてやっと今勇気を振り絞って声を掛けてくれたのだとしたら。その思いを私が踏みにじる訳にはいかない。それにしたって、もっと他に声の

掛けようがあったのでは、と思わなくてはならないけれど。だけど、そのもしものことを考えて、私もなんとか浅知恵を振り絞る。

そして出た返事が、これである。

「あるん……じゃないかな？」

煮え切らない返事。

「……へえ」

けど、黛くんは意外そうに声を漏らした。

「どうしてそう思うんですか？」

そんなこと聞かれても、分かる訳ない。

「えっと……、なんとなく」

私はなんとも歯切れの悪い答えを返した。あまりにも曖昧過ぎて、答えた自分でもちよつとだけ気持ちワルイ。だけど仕方がないじゃない。私はこういうこと、つまりSFと言えはいいのだろうか、それに対して、特別に興味がある訳じゃないのだから。

だけど、意外や意外。運良く、いや、この場合は運悪くと言ったほうがいいのかもしれないけれど、黛くんは、私の答えに興味を抱いたようだった。

「僕もそう思います」

黛くんは、目をキラキラと輝かせながら言った。

「は、はあ……」

私は惚けたように相槌を打つしかなかった。

何がいけなかったのだろう。いや、いけないということもないのだけれど。むしろ喜んでいるんだから良かったのかもしれないのだけれど。一体どこに、黛くんの興味をそこまで引く要素があったのだろう。でも、いずれにせよこれで後に引けなくなってしまう。

私は昔見ていたアニメの記憶を頼りに、必死にそれっぽい知識を掘り起こす。なんだっけ、もしもしボックス？

……ダメだ、全然思い出せない。というかそもそも、私にそんな知識はないに等しかった。存在していないので、無理に引き出そうとしても時間のムダである。もう腹を決めて、全部相槌で押し通すしかない。

「じゃあ例えですけど」

「う、うん」

「（これは別の世界には、どんな世界があると思いますか？」

黛くんの問いを受けて、私は想像を巡らせてみた。「ここじゃない世界では、ここじゃない私はいったいどんな生活を送っているんだろう。そもそも別の世界に私のような存在がいるのかどうかすら、よく分からないけれども、でももし、私という存在だけに留まらず、この世界とほとんどが一緒に、どこどこが違う世界があるのだとしたら。なんだかちよつとだけ、不思議な気分。」

もしかしたら違う世界の私は、この世界の私よりもお金持ちで……ってなんて夢のない。自分のあまりの想像力のなさに、我ながら恥ずかしくて仕方ない。

「黛くんはどう思うの？」

考えが煮詰まって答えが出そうになかったので、ちよつと申し訳なく思いつつも、黛くんにそっくりそのままお返しする。

「そうですね……」

「だけど私の卑怯なやり方に少しも嫌な顔もせず、黛くんは考え始めた。」

考え込む黛くんは、意外と画になって見えた。もともと黛くんは幼顔なので、考えている仕草がなんだか必死に背伸びしているようにみえて、それがちよつとだけ可愛いのだ。

普段はほとんど話さないだけに、こういう姿を見るのはちよつと新鮮だった。

「というかそもそも、なぜ黛くんはこのサークルに入ったのだろうか、と私は思った。ほかのみんなと話してるところをロクに見たことがないけど、このサークルに入ったことを後悔してはいないのだろうか。一応ここは、やりたいことがない人のための避難所的なサークルを謳ってはいるけれど、所詮ダラダラと雑談をする場所ではないから。果たして黛くんにはやりたいことがなかったのだろうか。」

黛くんがもしもこのサークルに入らなかつたら。黛くんは今頃どうしていたのだろうか。そんななんてことない想像も、もしかしたらパラレルワールドとして、どこかに存在しているのだろうか。

「……翼先輩？」

ふと気がつく、黛くんが私の顔を覗き込んでいた。急に黛くんと目が合ったので、思わずドキリとしてしまう。

「どうしたんですか？」

「えっと、その、ちよつと考えことしてて」

しどろもどろになりながらも、なんとか取り繕う。

「ゴメンね」

「いえ、こちらこそすみません。黙り込んでしまったので」

と、そこで会話が途切れてしまつて、沈黙が訪れる。ちよつと、いやケッコウ気まずい。なんとか話を続けたいと、そう思うけど、どう続いているのか分からない。願わくは、この気まずい空間そのものがパラレルワールドであつてほしい。なんて、自分でも何を言いたいかよく分からないけれど。だけでもししたら、どこかに場の空気をコントロールするのが上手い私がいる、そういうパラレルワールドがあるのかもしれない。もしそうなら今すぐにでも代わってほしい。今はそんな気分だった。

「さっきの話ですけど」

そうしてらうちに、黛くんの方から沈黙が破られた。

「う、うん」

私もなんとか相槌を打つ。

さっきの話という、たぶん、どんなパラレルワールドがあると思うか、ということだろう。それをあると仮定して話している以上、どんな世界があつたとしても不思議でないというのが、なんだか不思議な感覚だった。

黛くんはどんな世界があると思つているのだろうか。それとも、どんな世界を、あつてほしいと思つているのだろうか。

私は、黛くんの言葉を待った。

「僕らの男女が逆転した世界、というのは、どうでしょうか？」

「逆転？」

という、

「私が男の子で、黛くんが女の子だったらってこと？」

「そうです」

もしも自分が男の子だったら。そんなのちつとも想像がつかない。そもそもそれが、本当に私と言えるのかどうかというのも分からない。男の子である私は、この世界と同じ私でいられるのだろうか。

ちなみに黛くんの方はどうなのだろう。私は黛くんの女の子の姿を想像する。

女の子の黛くんについては、割と違和感がなかった。それは黛くんが、中性的、もつとと言うと女性的な顔立ちをしているからなのかもしれない。こんなこと言ったら、黛くんが怒っちゃいそうだけど。だけど、その黛くんがどんな仕事をするのかを考えてみると、やっぱり、私の想像でできる範疇を超えてしまう。もつともこれは、単に私の想像力の乏しさ故なのかもしれないが。

けど、やっぱりパラレルワールドはパラレルワールドであるだけに、現実からはなかなか遠い話なのかも。

「……いろいろ考えてみたけど、見当もつかないよ。黛くんは？」

「僕ですか？」

「うん」

黛くん自身は、どう思っているのだろう。黛くんは女の子である自分の姿を、容易に想像できてしまうのだろうか。そして、自分も女の子であれば良かったのに、そう思うのだろうか。それとも、男の子で良かった、そう思うのだろうか。

「ただ、黛くんの答えは、私の予想とは異なるものだった。」

「僕がもしも女性だったら……翼先輩にもつと早く話し掛けられたのかもしれないのにつて、そう思います」

「え、それって」

どういう意味。なんて聞ける訳がなかった。それはつまり、私と仲良くなりましたかった、とそう取ってもいいのだろうか。だけど、なんで私なんか。サークルのなかでだつて、それほど目立つてる訳じゃないのに。

私が黙ったままでいると、黛くんは真っ赤になって、持っている本で顔を隠した。「すみません……今のは忘れてください……」

その行動に思わず笑みが漏れてしまう。なんだろう、ちよつと面白い子かも。恥ずかしがり屋のくせに、本の上から微妙に様子を伺っているのがまた、なんとなく微笑ましい。

ちよこつとだけからかつてみたくなつて、私は顔を隠し続ける黛くんに話しかけた。

「ゴメン、ひとつだけいいかな」

「なんですか」

「黛くんは、なんでパラレルワールドの話をしよつと思つたの？」

「……ノーコメントで、お願いします」

黛くんは口をモゴモゴさせながら、やつとのことでそれだけを言つた。

「……私には気づいてしまう。」

黛くんが持つている本。タイトルから察するにそれは最近ベストセラーになつた本で、読んだことはないけれど、私も内容だけは知っている。

それはたしか、平行世界を行き来する話で。

もしかしたら黛くんは、私が部室に入つて来たときから、ずつと話題になりそうな何かを探していたのかも。

そんなあるかもしれない世界を想像して、ちよつと可愛いな、と思つてしまう私が出た。

また黛さんと二人きりになる機会が訪れた。それは初めて会話した時以来のことだ。

そもそもこのサークルは、主だった活動目的がないという性質上、つまりメンバーが自由に部室に出入りするという性質上、特定の人物と二人きりになるという状況に陥ること自体が稀だつた。それに俺自身、そこまで頻繁にここに顔を出す訳ではな

ったからなおさらだ。だから今日まで、黛さんと言葉を交わしたのは、あの日だけだった。

俺はあの日を境に、黛さんのことを少しだけ注意して見るようになった。そして、ちよつと変な子、というのがその後における俺の黛さんに対する印象だった。

あれ以来、俺と黛さんは、話すことがなかった。とは言っても別に話すつもりがなかった訳ではない。むしろ話す機会を伺ってみたいもしていたのだ。だが、黛さんは頑なに言葉を発しようとしなかった。いや正確にいうと、話す気がないのでなく、部室内に複数人がいる場合に限り話したくないらしい。時おり本の隙間から様子を伺う黛さんと、目が合ったりもした。そしてそれに気付くたびに、黛さんは顔を赤らめて目をそらすのだ。

口数が少なくなけりや、コロコロ表情が変わって面白い子なのに、と俺は思った。だいたい、黛さんは部室ではいつも本を読んでいるが、無表情で黙々と読み続けるといふ訳ではない。むしろ、すぐに顔に出るのだ。ホラーものだったら妙にビクビクして、サスペンスなら妙にハラハラしてみせる。そしてクライマックスに差し掛かると、妙にソワソワしただすのだ。よくもまあそこまで感情移入できるもんだと思う。見ているこっちは飽きないが。

今日も普段の例に漏れず、黛さんは本を開いて、それを読みふけていた。だが俺が部室に入ってきたのに気付くと、すぐに本をパタンと畳んだ。どうしたのだろう、と一瞬思ったが、部室の静寂さを肌で感じて理由を察する。部室には俺と黛さんをついて、誰もいなかった。

俺は手頃な位置にある椅子を引っ張ってきて、腰を落着けた。

たぶん今日を逃せば、次に黛さんと話す機会がいつ来るか分からない。さて、どうやって話しかけたものか。

何の本を読んでいるのか、これを切っ掛けに話をするのが一番無難なような気がするが、一方でそれは無粋なようにも思えた。この前読んでいた本、それが平行世界を行き来する内容であると気付いたことを、悟らせる結果になってしまいかねないから。そうなってしまったが最後、黛さんのことだから、恥ずかしがってマトモに会話

できなくなってしまうかもしれない。そんな事態は、できるだけ避けたいところだった。

少し悩んでから、俺は言葉を紡いだ。

「久しぶり」

しかし俺はそれを、言ってしまった後後悔する。黛さんの目が、驚きで丸くなったのだから。だがそうなるってしまうのも無理はなかった。なにしろ俺と黛さんが会ったのは別に、久しぶりという訳ではない。このシチュエーションが久しぶりだっただけで、俺たち自体は会話がなかったにしろ、部室で何度も顔を合わせていたのだ。

初っ端から重大なミスをしてしまった俺は、ほとほと困り果てた。なぜこんな凡ミスも。もしかしたら自分でも気が付かなかっただけで、この状況に緊張していたのかもしれない。

「えっと、これはだな、その……」

取り敢えず声を発してみるも、上手く言葉にならない。

だがそれが、黛さんにとってはどうやらツボだったらしい。俺の痴態を見て、彼女の顔が少しだけほころんだ。

そして黛さんは微笑みながらこう言った。

「お久しぶりで、翼先輩」

「お、おう」

俺はろくに声をかけられないまま、黛さんから目を逸らす。目を合わせたままでいるのが、何だかえらく気恥ずかしかったからだ。それが痴態を演じたからなのか、それとも別の理由があるのかはイマイチ判然としなかったが。

俺が目を逸らしたせいなのか、そこで会話がプツリと途切れる。普段他の連中と話している時ならこんな風に静寂が訪れることはないのだが、今は俺と黛さん以外誰もいない以上、それをフォローする人間もいやしない。ましてや相手が黛さんであるからして、それを彼女に期待することもできないだろう。

そもそもなんで俺なんだろう、と俺は思った。決して少なくはないサークルメンバーの中から、なぜ俺にだけ。もしかしたら、それは俺だからという訳ではなくて、たまたま二人きりになった人間が俺だっただけなのかもしれない。だとしたら、多重に

あり得る世界のどこかに、俺ではない誰かと話す黛玉さんのいる世界が、存在しているということにもなるのだろうか。その世界の可能性を考えた時、俺はなんとも言えない気分になった。

「黛玉さん」

俺は黛玉さんに声をかけた。

別にその可能性を確認しなかったという訳ではない。ただこの世界が、限りなくある世界の中の、ちっぽけなひとつに過ぎないということに、安堵しただけだ。

「はい」

俺の声を聞いた黛玉さんは、コクンと小首を傾げた。

「黛玉さんは、なんでこのサークルに入ろうと思ったの？」

俺のその問いは、黛玉さんにとって、どんな意味を持っていたのだろうか。

「えっと、言わないとダメでしょうか」

黛玉さんは、困惑した様子で言った。

「……いや、ちょっと気になっただけだよ」

俺は別に、黛玉さんを困らせたいという訳ではなかった。だから俺は、敢えてその間に逃げ道を作った。だけどそれが、却って黛玉さんを困らせているようにも見えてしまふ。

黛玉さんは、しばらく悩んでから、やがてこう言った。

「私、誰かと話すのがニガテで、だから、誰かと話す切っ掛けが欲しくて」

嘘だ、と思った。いや嘘だと決め付けるのはまだ早計かもしれない。だけど、だとしたら、みんながいる時になぜ黛玉さんは話そうとしないのだろうか。それはもしかしたら、自分が変わることにまだ、迷いを持っているからなんじゃないだろうか。

「いいことだと思う」

「……えっと」

「そうやって、自分を変えようと頑張るのは、いいことだと思うよ」

俺はイジワルだった。黛玉さんの迷いを感じているくせに、まるで後押しするような言葉を投げかけるのだから。

「あ、ありがとうございます」

黛玉さんは居心地悪そうに答えた。

「でも……気持ち悪いですよね」

「何が？」

「私なんかが変わろうとするなんて」

黛玉さんは、いったい何に迷いを感じているのだろうか。俺には分からない。けれど、黛玉さんが感じていること、それが見当違いなんじゃないかということだけはなんとなく、分かるような気がした。

「そんなことはない」

だから俺は、その言葉を否定した。

「なんでそんなこと、翼先輩に分かるんですか」

黛玉さんは半ばムキになりながら反論する。

そんなこと、分かる訳ない。だってそれはたぶん、黛玉さん自身の問題だから。ただ、周りがそれを拒否すると思っているのなら、それはきつと大きな間違いで。

そして俺は言った。

「黛玉さん、可愛いから」

「え……」

「俺は好きだよ、黛玉さんのこと」

その言葉の意味を、黛玉さんは、すぐには理解できていないようだった。だけど、時間が進むにつれ、黛玉さんの顔は、耳の先まで赤くなっていく。

そしてついに我慢できなくなったのか、持っている本を開き、そこに真っ赤な顔を勢い良く埋めた。

この日はもう、これ以上黛玉さんと話すことはできなかった。なにしろ他のメンバーが部屋に入って来るまで、黛玉さんはずっと、本に顔を押しつけたままだったのだらう。

なんであんなこと言ってしまったのだろう。思い出すだけで恥ずかしくて、顔から火が出てしまいそうだ。

黛くんは、可愛いと言ってしまった。

それから、好きだ、と。

普段ならあんなこと絶対言えないはずなのに。必死に別のことを考えようとしても、なぜ、ドウシテ、がアタマから離れない。

黛くんのほうは、私にあんなことを言われて、いったいなんて思っただろう。可愛いなんて言葉、おそ男子に使うものではない。もしかしたら気を悪くしていただろか。そんなこといくら考えたって、もう後の祭りなのだけれど。

黛くんにどんな顔して会えばいいのか分からなくて、ここ最近では部屋に顔を出していなかった。それに部屋にいたらそれだけで、あの日のことを思い出してしまいそうだった。考えてしまったら最後、恥ずかしさに絡め取られて身動きがとれなくなってしまうそう。このままじゃ良くないって、それは勿論、分かっているのだけれど。

そのうち、あまりに顔を出していき過ぎたせい、同じサークルの子から心配されてしまった。それで私はちょっと申し訳ない気持ちになる。これは私と黛くんの問題であるのだから、いや私が勝手に抱えてるだけなのかもしれないけれど、他の友達に心配をさせる理由なんてどこにもないはずなのに、なんて。

この辺で一度、部屋に行ってみるべきなのかもしれない、と私は思った。友達にあまり迷惑をかけるのもいけないし、なにより、これ以上この状況を引き延ばしたって、何も変わらないことが分かっていたから。

それにあまり気負うことはないのかもしれない。黛くと顔を合わせるといつても、部屋には他の人もいるのだ。それはつまり、黛くんは話しかけてこないということでもある。話しかけてこないなら変に緊張する必要もないし、恥ずかしいのだった、そこから少しずつ慣らしていけばいいのだ。そう思っただけは、ちょっとだけ気が楽になった。

だけど、そう思ってしまったのが間違いだった。

私が意を決して、この日入った部屋。そこには黛くん、彼しかいなかったのだ。

なんて間の悪い。

私は自分の運のなさを呪うしかなかった。私と黛くんが二人きりになる機会なんて、そうある訳ではないはずなのだ。それなのに、よりによってなんで今日なのだろう。

黛くんは、いつものように本を読んでいた。でも、なんだかちよつとソワソワしている。それも、いつものように本に熱中している訳ではなくて、どこか落ち着きのない感じ。

黛くんのほうも、この気まづさを感じているのかな、なんて思った。けど、もしそうなら、感じている気持ちは同じであるはずなのに、私と黛くんとを隔っているこの距離は、いったいなんなのだろう。

このままじゃいけないよ、いや、きつといけないはずだ。

「黛くん」

私が声をかけると、黛くんは肩がビクッと動いて、それから顔を上げた。

「なんですか」

黛くと目が合って、私は咄嗟に目を逸らす。やっばり、ダメだ。まだマトモに黛くんのことを見れそうにない。

それもこれも、変なことを口走ってしまった自分のせいだ。そうだ、あの時は自分じゃないみたいに勝手に口が動いてしまったけど。あんなことさえ言わなければ、こんな思いしなくて済んだのに。

「この前のこと、忘れていいから」

私は言った。

「この前？」

「うん、この前言ったこと」

思い出すだけでこんなに恥ずかしくなってしまうなら、忘れてしまえばいいのだ。黛くんもその時のことを思い出したのか、すぐに顔が真っ赤になっていた。でも、前みたいに顔を本で隠すようなことはしない。黛くんは、ずっと私のほうを見たまま、言った。

「忘れることなんて、できません」

それもそうだ。言った私もこうやって、なんとか忘れようと四苦八苦しているというのに、それをいきなり忘れろだなんて、ムチャな話だ。

でも、それが一番良いはずなのだ。そのまま溜め込んで、ギクシヤクしてしまうよりはずっといいはずなのだ。

「なかなか忘れられないかもしれないけど、私も頑張って忘れるし」

すると黛くんは一瞬ムツとして、何も言わずに立ち上がった。そして私のほうに向かってくる。

「え、えっと」

何か怒らせてしまうようなことを言っただろうか。よく分からない。だけど私がそれを考えている間にも、どんどん差は縮まっていつて、そしてついに、手を伸ばせば触れる程度の距離まで接近してしまう。

黛くんは、私を見据えながらこう言った。

「なんでそんなこと言うんですか」

「……え？」

だけど、それは私にとって予想外の言葉だった。

「なんで忘れてもいいなんて、言うんですか」

黛くんは、私のことをずっと見つめ続けていた。まるでそれは、私以外のすべてのものを視界から消しているようで。私もその瞳に、いつの間にか吸い込まれていた。

「僕は忘れるつもりはないです」

真剣なのが分かった。それは、黛くんの声が僅かに震えていたからだろうか。それとも。

黛くんの両腕が、私の肩を掴んだ。

「だって僕は、翼先輩のことが、好きですから」

私は黛くんの言葉を、飲み込むのに少しの時間を要した。

これってもしかして……告白？

え、どういうこと……つまり黛くんは私のことが好きで……。

思考が追いつかなくて、私は思わず、目を閉じた。

その時——自分の唇に柔らかな感触が残る。

「……っ」

私はあまりの出来事に、ギョツと目を強く瞑った。

これは……もしかして。

感触が消えたのを待ってから、私は恐るおそる目を開ける。

そこには顔を真っ赤にして俯く黛くんの姿があった。私はその顔を、ただぼうっと見つめ続けるしかできない。

黛くんは俯いたまま、焦るように本をカバンにしまった。そしてカバンを持ち上げて、一言。

「……お疲れ様です」

私は黛くんがいなくなってしまうから、しばらくはそこから動けなかった。心臓が、必要以上にドキドキと脈打っていたからだ。

気持ちが落ち着くのを待ってから、唇に触れた。

黛くんは、果たしていつから、こんなふうに思っていたのだろう。それは、よく分からない。

けどそれなら、私は黛くんのこと、どう思っているのだろう。

少なくとも私は、黛くんのことを、好きだと言った。でも、それは普段の私じゃあり得ないことで。でも、現に言ってしまったているし、言った記憶もある。でも、そこに私の意識があったのかと言われると、分からなくなる。でも……。

でも、黛くんが好きと言われた時、私はたぶん、嫌じゃないと思った。

考えれば考えるほど頭の中がまとまらなくなって、私は小さく膝を抱えた。

だけどこんな流れを作り出したのは、間違いなく私だった。私の意識が存在していない、そんな私。

もしも世界が無数に存在して、それがどこかで繋がっているのだとしたら。この世界に変化をもたらしたのは、きっと私じゃない私、なのかもしれない。

古典に溶ける

草津出

黄色い線を踏んでいた。

黄色いようで、黄色くない、それでいて実は黄色い気がする、不思議な線だった。それは余剰を空想したような淡い色ではなく、波状のクウカンを創出していくような濃い、或いは恋い色をしていた。

その黄色い線をなぞるように歩き続けながら、僕は彼のことをぼんやりと考える。黄色と聞いて彼は、何を想像する、或いは創造するのだろうか、僕は思った。

黄色い線から足を離す、或いは放すと、その波を打った直線は上下に蠕動を繰り返しながらそのしなやかな身体を軋ませた。自動車の排気に当てられてもお静止を強要されるそれは、まるでそこに僅かな余白を生み出しているようだった。そして僕はその行く末を見守りながら、窮屈な自分の姿に、水分をたっぷりと含んだヒニクを滲ませるのだ。

僕は古典的な作品を読むのが好きだった。ただしそういう作品自体が好きなのではなく、その作品を読んでも僕または彼、ひいてはその時間が好きだっただけなのだけだ。山積した無のなかで唯一、読書という時間だけが、僕が生、或いは性、聖を実感できる時間だった。

ちなみに古典といってもさほど時を遡るわけではない。だって僕が古典を読んでいるのは、僕のいないそこに、僕ではない僕を見つけないという願望によってだけだったのだから。源氏物語、違う。そこまで遡ってしまえばもうそれは古典ではなく死典だ。ホームズ、馬鹿言え。僕にとっては奴なんてただのヤク中ではない。そもそも僕は推理物になって興味はない。ルパン、デュパン、そんなもの、僕にとってはフランスパンと同じ。

パン屋を横切った時に微かに鼻先を掠めるふくらとした、或いはしっとりとした、その匂いを肺に吸い込みながら、僕は最近読んだ古典的な作品のタイトルを、ひとつひとつ、丁寧に、ドミノみたいに並べていった。

僕のいう古典というのは、簡単にいうと本屋、或いは本を販売しているそれのようなその新刊コーナーに並んでいるような奴のことをいう。具体的にいうと、店長のおすすめ本とかいうポップが踊っている奴がほしいそれである。僕はそういった頭の悪そうなポップを見ると、それを描いたであろう店長のアホ面、或いは馬鹿面を思

い浮かべながら、それらをついついアホ、或いはアホであるように装ってみせる真性の、或いは真性なる馬鹿みたいに買い漁る。とはいえ店長のそのチョイスに全幅の信頼を置いているというわけではなく、勿論自分の直感に盲目の自信を抱いているわけでもない。僕はただ、その作為性の無さに酔いしれているだけだった。しかしその行為の無作為性そのものに作為性が存在していることは果たしていうまでもない。僕は自ら本を選ばないという行為を選びとっているのだ。この行為をするにあたって、その信頼性は、選びとった本が全て古典であるという結果によって裏付けられている。つまり、本というものは、世に出たその瞬間に、古典に成り下がるということなのだ。

古典はその形状からして、自分が古典であることを自ら物語っていた。そこには古典であることへの肯定、或いは諦めに似たようなものを包み込んで、乃至は挟み込んでいた。ただし挟むといってもそこに、切断するといった概念はなく、むしろ過去の切断面を見ることが不可能なほど同じ時が進んでいるだけだ。そこに未来を見たというのなら、それはおそらくエゴか、或いは単なる建て前だ。

とある建て物の前で足を止めてみた。それはなんだかカラフルな色合いで、ちよつとしたレゴみたいだった。いや、それをレゴと決め付けることそのものがすでに、エゴであるのかも知れない。

それはデザインナーズマンシンのようだった。というのも、僕はまだそれがマンションであるという真実、または信実、或いは実質的、或いは物質的に虚構であることを認めていなかった。地に足がついていないそのカラフルさには、質量があるのかさえ怪しい、もとい妖しい。たぶんこんなマンションに住もうと考える酔狂、崇高な思考を持つ人間はおそらく日本、或いは世界、或いはこの世に一人しかいないだろう。

う、うめ、うめず、うめずか、うめずかず……。

僕、或いは僕の身体を乗っ取った、或いは則つた僕、或いは僕に近しい何かという僕は、マンション、或いはマンションに似たエゴの固まり、或いは塊から目を背け、歩き始めた。そもそもそれに質量、或いは量という名の質が存在しているのかという問い自体が、くだらないものでしかなかったからだ。僕はニュートンでなければ、乳頭、つまり乳首でもない。だから万有引力なんかに興味はないし、無論ミルクを吐き

出すというような物理法則、或いは質量的法則を無視した離れ業を披露するつもりもない。だけど僕、或いは僕以外の偶像が生きるこの世界には、常に質量という概念が、概略的、或いは謀略的に付きまとっている。だから僕、或いは僕でありたいと願う僕は、質量という名の、ある種の暗黙の了解、或いは了見、それがあつてにせよないにせよ、その良識に従つて生きていくしかないのだ。

僕はアスファルト、或いは世界または地面、或いは地層、或いは思想、或いは宗教、或いは神、髪、紙、つまり平面的、或いは平面上のどこかに存在している何か、或いは何物でもない何かのようなものを、踏みつけ、或いは踏みなりに、或いは敬うべき存在であることを無自覚に自覚、或いは自覚的に夢想しながら、そのスラリと、或いは際限なく、或いは再現不可能に延びる、不可思議な、或いは不可解な、或いは付加価値を見出す、或いは認めることのできない、途方もない、或いは何も存在し得ない、道、或いは境界、或いは国境を有する物理的存在、或いはメトロポリス、或いはメトロ、その価値観、或いは価値そのもの浮上可能性、或いは確率を説く、或いは解く普遍的なものが存在するかもしれない固形物、有形物、或いは形成物の上を歩いた。

目指している、或いは目指すことを強いられている、目的地、或いは結果の逆算によりたどり着くことを強いられた例の場所までは、あと数百メートルというところだった。僕は一日のうちには必ず、ここで言う一日とは一年を三六五に等分したもので、或いは等分されたものごとであるが、その場所、或いはその空間を、訪れて、もとい胸に刻むようにしていた。その場所が、いやその場所にいる彼が、僕にとってかけがえのない、若しくはなくてはならない存在だったからだ。

古典に溶ける

足元を見ると、昨日、厳密にいうと今日の零時頃に降つた雨の雫が、というよりかつて雨の雫だったものが、アスファルトに染み込んで、或いは染み渡つて、或いは沁み渡つて、蒸発するのを待つていた。僕はその雫、或いは水滴、或いは水分、或いは水分子に、自分の姿、自分の弱い、または無力な姿を、無意識に、或いは無自覚に重ねてしまつていた。彼が僕に与えてくれたものはあまりにも大きいものだったのに、それに比べて僕は、何もできやしない。僕は彼の元に毎日通つて、それで何かが出来た氣になつてゐる。それは既にただの自己満足なのかもしれない。或いは自己憐憫と

いつでも差し支えないだろう。僕はいつの間にか彼を自らの心を満たすための手段として利用してしまつてゐる。そしてそれに気づいた僕は、さらなる申し訳なき、或いは罪悪感といつてもいいかもしれない、若しくは喪失感であると言ひ換えることも出来るはずだ、そんなどうしようもない自分を見出す。そしてそういった自分を肯定することを放棄した世界の終末に、いつも彼のいる部屋が少しづつ、霧が解けて、溶けて、或いは融けていくように見えてくるのだ。

僕は、ぼくは、ボクは、ボクハ……。

僕はその金属製のドアノブにある種の冷たさを感じながら、それをひねつた。かちやり、と音がして扉が、或いは僕と彼とを結ぶ不確定な揺らぎが、開き始めた。それが質量を持つ物質なのか、或いは一種のブラックホールのように熱量までも奪い去つてしまふものなのかは、僕には分からなかつた。だけど一つだけ分かっているのは、それが質量を持つかどうかなど、僕にとつてはさしたる問題ではないことだ。

彼はその部屋の奥、光の差し込む窓側、或いは廊下側に一番遠い位置にあるベッド、或いは床からの僅かな高低差、或いは肯定され得る限りの空間の上、或いは領域の中で、眠りについていた。いや、眠るということを能動的な行為だと定義付けるというのなら、この言ひ方は正しくない。死というものの反証を生きていることによるものだとは仮定するならば、彼は今、間違いなく死んでいるのだから。

そう、彼は死んでいた。もつと正確にいうと、生きることの辞めざるを得なかつただけであるが、少なくとも今の彼と僕との間には、生への対話は存在してゐなかつた。それを生への執着、或いは終着、集束というのなら、彼はもちろん、僕さえも、生きるということの価値を欠片も、或いは架け橋となるべき哀れな空想も、持ち得てゐなかつた。

窓の側にある花瓶が、花を、或いはその裏側にある曖昧な虚空を、或いは呼吸を溜め込んで、そこに佇んでいた。僕はその水を、たつぷりと外の空気、或いは歓喜、或いは狂喜、狂気を溜め込んだ新鮮な、或いは神聖な水に換えた。それが余りにも黒ずんだ虚空を、或いは人の呼吸を吸収し過ぎていたからだ。

そうして僕はやつと椅子、丸椅子に腰をかける。この部屋は余りにも質素、或いは簡素、閑散とした場所だった。ここには僕の座つてゐる椅子の他に、彼の眠つてゐる

ベッド、そして窓と花瓶しか無い。それ以外には白い壁、少なくとも人間、人間らしく振舞う人間、或いは僕にはそう見える、それしか存在していなかった。

僕は白という、その色が好きではなかった。白はこの世の全てを、例えば僕が今取り出した本に印字された無数の文字列でさえも、等しく吸収してしまいそうな途方もない質量を有しているからだ。質量を持たない、或いはそれを意識の枠外に放置している僕なのに、白という余りにも巨大な質量を目の前にしてしまつたが最後、それを無視出来なくなってしまう。それなのに僕がこの部屋、彼の元に足を運んでいる理由は、彼への贖罪のつもりなのか、それとも単に罪を償っているつもりになっているだけなのか、つまり、自己満足だけなのか。だけでも、僕は既にゲンジツを直視できないうる。

僕は本を開いて、古典を読み始めた。古典的な、或いはゲンジツを超越した、或いはゲンジツとの隙間を縫うように存在する、質量のない、世界へと逃避するために。

無題、

まじめなひとたち

草津出

べち、べち、べち。

アリの巣をじつと見ていた。

小指も入らないくらい小さな穴に、何匹ものアリが、出たり入ったりしている。こんなにアリが入っていくものだから、僕は穴の中でアリが詰まってしまうかわいいか、ちよつと心配になった。

僕は周りを見回した。手頃なサイズの木の枝を探していたのだ。それさえあれば、そこに穴に突っ込んで、ぐるぐるかき回して入り口を大きくしてあげることができ

る。ただど近くには、丁度いい長さの枝がなかった。僕はどうしたものかと考える。

そのとき、ピンと閃いた。アリを救う方法を。

僕はおもむろに、ズボンのファスナーを下げ、社会の窓からモノを取り出した。

先っぽから、黄色い液体が流れ落ちていく。快感が、股間から頭のほうに登っていく。僕は思わず身震いした。

液体は、アリの巣にみるみる吸い込まれていった。これできつと、穴の中で詰まっているアリたちを、流すことができただろう。これでアリは危機を免れた。

僕は満足して、モノを引つ込めた。

ひとはオシッコをきたないというけれど、僕はそうは思わなかった。だってオシッコは、つい今まで僕の身体のなかにあったものなのだ。それをきたないというのなら、僕自身さえも汚いことになってしまう。

僕はキレイ好きだった。キレイ好きであるという自負があった。なんせ僕はお風呂に入らなくても、清潔感を保っていられるからだ。ときおり身体のおちこちが痒くなるが、それはきつと僕が清潔過ぎるゆえの副作用なのだろう。

べち、べち、べち、

おしゃべりしてんじゃねえよ、カス。

べち、べち、べち。

アリの巣を後にした僕は、ベンチに腰をかけた。そこは僕の、毎日の寢床だった。ここは快適な場所だった。すぐ横にあるカエデの木の葉擦れの音が、心地よいビジーエムを提供してくれる。さらに秋になると、僕に赤い布団をかけてくれた。カエデはなかなか気が利いている。

僕は横になった。そして目を閉じた。カエデの葉のサラサラとした音が、僕の耳をくすぐっていた。

僕は寝返りをうつ。するとその、ベンチの木と木のあいだに、ミノムシがくっついて

いるのを見つけた。なんてラッキーなのだろう、と僕は思った。

僕はミノムシをむしり取って、口のなかに運んだ。そして舌の上で転がす。ザラザラとした舌触りと、土臭い香りが、たまらなかった。唾液によって程よく柔らかくなったところで、僕はそれを勢い良く噛みつぶす。ぶちゅ、とした食感の後に、液体が漏れ出てくる。それは次第に口のなかにひろがって、僕を幸福感で満たしていった。

ミノムシは僕の好物だった。ほろ苦さのなかに、まるやかな甘みが広がってくる。それは少し前に食べた、人間の脳味噌に少し似ていた。もしかしたら、ミノムシは、人間の脳と同じ成分でできているのかもしれないと思った。

そう思ってしまった途端、どうしてももう一度、脳味噌が食べたくなった。僕は、ベンチから跳び起きて、立ち上がった。

べち、べち、べち、

スマホいじってんじゃねえよ、クズ。

べち、べち、べち。

ひとの脳味噌の味に飢えた僕は、取り敢えず、もつと人通りの多い場所に移動することにした。

でも、どこがいいだろう。たとえひとが多くても、お巡りさんがいると厄介なのだ。お巡りさんは、僕が脳味噌を食べているのを見つけた瞬間、自分にも寄越せと、しつように追いかけてくるのだ。お巡りさんは失礼だから嫌いだった。そんなに食べたきゃ、ちゃんと自分で殺すのが礼儀だというのに。

考えているだけでもラチが明かないので、ひとまず歩くことにした。

尖った砂利が、僕の足の裏をチクチクと刺す。足の裏は既にキズだらけだった。でもこれが本来の人間なのだ。靴を履いているのがそもそも、おかしいのだ。ひとの足は靴の柔らかい素材に慣れて、貧弱になってしまった。それは普段、足が本物の地面に触れ合っていないために起きた悲劇だ。そう、それは文章を読む上での句読点とにている。句読点がなければ、もうひとは、文章を読むことがままならなくなってしまうのだから。

そしてそれはきつと、脳味噌の味も同じだった。法という制約がない時代では、ひとは、自由に人間を殺してその脳味噌を掬うことができた。僕が脳味噌の味に新鮮味を感じてしまうのは、きつとこの時代が悪いのだ。

べち、べち、べち、

なんでも許されると思つてんじゃねえよ、ババア。

べち、べち、べち。

地面でアリが行列を作っていた。僕はそのなかの一匹をつまみ上げる。そして口のなかにいれる。

アリは口のなかで大はしゃぎしていた。たぶん、僕に食べられるのが嬉しいんだろう。その期待に応えるように、僕はアリに歯を突き立てた。カリ、とした歯触りのあと、ヌル、とした柔らかな肉へと、歯が届く。

レモンの味がした。

爽やかな酸味とほのかな甘みが、レモンににっていた。僕はレモンの果汁を楽しむように、喉を鳴らした。

この酸味はきつと、アリの苦勞の結晶なのだ。アリは、ひと以上に、タテ社会のなかで生きていく。きつと苦勞が絶えないはずだ。そしてこの、生きても生きても先の見えない人生に、嫌気がさしているはずなのだ。だから僕に噛み砕かれたとき、アリはやつと人生から解放されることに、悦びを感じていたに違いない。

アリの行列をもう一度見てみた。アリはみな、せつせと歩き続けている。僕は彼ら

のことがかわいそうになった。だから僕は、その行列を形成しているアリたちすべてを、残らず踏みつぶした。潰れたアリは、お尻からしろっぽい液体を垂れ流しながら、どこか嬉しそうな顔をしていた。なかには、首と胴体とがお別れしているながらも、まだうごめいているやつもいた。僕は、彼のことも苦しみから解放してあげたくて、さらに念入りに踏んであげた。

べち、べち、べち、

だまれよ、ガキ。

べち、べち、べち。

いつの間にか、賑やかな場所に出ている。建物がやけにキラキラして、見ていて飽きない。

すぐそこで女のひとが歩いている。

そのひとはすごく豪華な服とバッグで着飾っていた。僕はそのひとがかわいそうに思えた。だって、あんなもので身を覆わなきゃ、自分を護れないんだから。きつと彼女自身も、悲しいはずだ。

あのひとに決めた。僕はあのひとの脳味噌を食べることにした。僕は彼女に近づいていった。

なんですか。

あなたの脳味噌をください。

いいですよ。

僕はお尻のポケットから、トンカチを取り出した。そして、思いっきり振り下ろす。

女のひとから、ものすごい勢いで、真っ赤な血が噴き出した。そのひとは、あまりの悦びに、歓喜のこえをあげていた。僕はさらにトンカチを振り下ろした。

しだいに女のひとの額から、しろいものが見えてきた。まわりが赤いから、しろがいつそう際立って見える。

僕はその、しろにめがけてトンカチを振った。

とんとんとん。

ぐちゃあ。

うまいうまい。

するとやがて、黒い服を着た男のひとがやってきた。

私にも脳味噌をくれませんか。

だめです、自分でやってください。

ちがいます、ちがいます、あなたの脳味噌です、あなたの脳味噌をください。

なんだそういうことか。僕はてつきり、今食べているやつを横取りされるのかと勘

違いしてしまった。

いいですよ。

僕はじぶんの頭をトンカチで叩いた。

とんとんとん。

でも、赤い血は吹き出しても、それ以上のものは出てこない。

どうしよう、困ったな。

すると、黒い服を着た男のひとは、ふところから、黒い銃を取り出した。

ちようどいい、それで僕を撃ってください。

いいですよ。

ばん。

うわあ。

頭がスツキリとした。

でも、なんだか頭がぐらぐらする。

それに、なんだ、か、ねむ、くなつ、てき、た、

べち、べち、べち。

おや、誰だろうか。

チープ・ダイアリー

八名井明

夕暮れも終わり、暗闇が空を覆う頃合いになっても景色はあまり変わっていない気がしていた。

外には街灯がある。

施設内には照明がある。

だから、安心して暮らせるのだ。暗闇に怯えるような暮らしは現代に存在しないのだと思う。お化け屋敷を怖がるのは、未知数に震えているだけのことなのだ。中にどんなものが待っていて、どんなアクションをするかを把握していれば怖いもの知らずになるだろう。

けれどそうしたらお化け屋敷の意味が消滅することは間違いない。

暗闇とは言えぬ道を進みつつ、通りにあるコンビニに立ち寄ってから今日の献立でも考えようと思っていた。しかしそれでも実際にそうしようとしても、仕事でへとへとになっていたから、コンビニにあるお総菜で夕飯を済ましてしまおうと考えてしまっていた。

だらけカウントが増加する。

今月のだらけカウントはこれで五つ目になっていた。まだ月が始まって一週間も経過していない。

一つ目は友人の誕生日を祝わなかったこと。彼女とは長い付き合いだったから、少しぐらい遅れても悲しむはしないだろうと思ったから。

二つ目は肌の手入れをサボったこと。手入れを一日忘れたら一週間忘れたのと同じだ、と母に言われたことを思い出す。

三つ目は洗濯物を溜めすぎたこと。大量の洗濯物を処理するために丸々一日かけたのは痛手だった。

四つ目は明日行くはずの予定をキャンセルしたこと。彼には申し訳ないけれど、私は動物園が苦手なのだ。あの生き物の臭いがずっと忘れられない。子供の頃の思い出はなかなか離れていつてはくれない。

そして、五つ目。

決まってだらけカウントは休日と休日前に増加していく。休みの日。仕事のことを考えなくていい日。なんて素晴らしい響きなのだろう！

だからこそなのだろう。気の張った精神がこんなにも緩むのは。

コンビニに到着すると私は迷わずポテトサラダとカルボナーラを手にした。デュラム小麦は大好物だし、手に取ったポテトサラダは普通のものより少しだけ値の張るものだ。それにこうやってコンビニ飯を食べるのは少々安っぽく見えるかもしれないが、私にとってはご褒美のようなものになっていた。

アルコールの類には目も暮れず、レジへ進んだ。飲むと寝付きがよくなっても寝起きが酷くなってしまいうから、避ける。

千円にも満たない温められたご褒美の入っているビニール袋を片手にスキップ交じりの足取りで家へ。駅からやや離れた場所にあるこのマンションは周りを坂に囲まれていることから徒歩には向いていないね、と友人に言われてしまっている。私はそう思わない。坂を登り切ることの高揚感が堪らないの。

マンションの入り口で鍵を挿し込み、部屋番号を入力する。後は自分の部屋に向かうだけだ。

購入したての私の部屋の電気を点ける。ただいまは言わない。最初の内は実家に居た頃の名残で言っていたものの、少しずつ虚しさを感じてしまっただけはそれが蓄積されないように言わないようにしている。ビニール袋を台所に置いてから手を洗い、風呂の準備をする。食事の後には風呂というのが私の中でルールになっていた。

湯船を洗ってボタンを押すだけの簡単な作業をこなす。

レンジにカルボナーラを容器ごと突っ込み、温めている間にスプーンを取り出した。ポテトサラダを開封し、スプーンで掬って食べる。このやり方は、皿を使わない賢いやり方かつ、外では出来ない食べ方だ。ソファに腰掛けると、そのまま沈んでしまふのではないかと思ってしまった。

ポテトサラダをつついてみると、あつという間にカルボナーラは温め終わっていた。まだポテトサラダは半分以上もある。

ふう、と息を吐く。

銀色に光るスプーンが私を逆さまに映している。

逆さまの私を見つめて嬉しそうに騒いでいたのは、何時のことだったか。

子供の頃は何もかもが不思議に見えていたから、それを知ろうと一生懸命に——半ば躍起になって過ごしていた気がする。学校の勉強はなあなあに。雑学にはとことん首を突っ込んでいた気がした。

結局私を知っていることと言えば、この世の常識とちよつとしたおもしろい話ではない。まだわからないことがたくさんある。けれどももう食欲に求める気持ちにはならないだろう。

このコンビニのポテトサラダは美味しいな。

子供の頃はコンビニ食と縁遠かったので、こうやって食べることを「褒美」としている。味の善し悪しではなく、ただ単に、食べることを選ぶことが楽しいのでそうしている。

私は子供のままなのか、大人になっているのか不安になる。

何がどうした、何処が変わったのか。いやは何も変わっていないのかもしれない。

スプーンを口に含んだまま立ち上がりようやくカルボナーラに手を出そうとした。携帯が鳴っている。

初期設定から変えていない着信音が部屋に響く。カルボナーラを置き、ディスプレイを確認した。叔母さんだった。

「もしもし」

叔母さんは嫌いだ。

「もしもし？ 美香ちゃん？」

いつも泣きそうな声で話しているから、苦手だ。

「あのね。そっちにね、京が行っちゃったかもしれないの」

「京くん」

誰のことであるか理解するのに時間がかかってしまった。京くんは私の年の離れた親族の一人だ。

いつもびくびくしている子供で、新年の親族の集まりでも本を読んでいるか他に集まっている子供たちの聞き役に徹しているような子供のはずだ。その京くんが叔母さ

んの家からこちらに来るとなると、電車を使って二時間半はかかるだろう。あの子に二時間半の旅路は、辛くないだろうか。

叔母さんは号泣しているような声で私に京くんを探してね、探してねと言う。

「でも叔母さん。京くんが来るって言っても、京くんは家に来たことがないはずだけれど」

「だから、だから不安なのよ。置き手紙に、美香さんのところに行きますって書いてあるだけで、もう。お財布は持っているから、多分そうでしょうって……」

「駅名は知っているの？」

「知っているはずよ。あの子、電車とかに興味があった時期があつて、それでみんなの住んでいる場所は何処だつて、知ろうとしていたから、きつと……」

「それは何時の話なの？」

「さあ、何時、何時だったかしら……」

曖昧な返答をされた。私は思わず電話を切つてしまおうと思つた。適当すぎる。泣きそうな声で話して、同情を煽っているだけだ。この人は何も行動をしようとしていない。自分で探そうとはしているのかもしれないが、それでも押しが弱いと感じてしまう。

だからきつと私は叔母さんが嫌いなのだ。

京くんの顔を思い出し、京くんとした会話の内容を思い出せる範囲で列挙していく。あまり有効ではなさそうだが、子供が行方不明となつては動き出さない訳にもいかない。

「叔母さん。じゃあ、探しますから。京くんを探して、見つけたらまた連絡します。

勿論、他の親族にも連絡はしてあるとか、する予定だつたりとか、まあ、そういうことは、よろしく願います」

「そうね。美香ちゃんだけじゃなくて、他のみんなにも話さなくちゃ、だめよね。わかつたわ。美香ちゃんよろしくね。お願いね。探し出して頂戴ね」

ううっ、とわざとらしい声が聞こえたので、流石に耐えられなくなり電話を切つた。携帯電話の電源も切つておく。時計を確認した。午後六時前。叔母さんはパート

だったのだろうか。けれど、それを考えても意味が無い。

着ていたスーツを脱ぎ、私服に着替える。引き出しを開けて最初に入った服を選んだので、着こなし等は全く考えていない。どうせコートを着てしまうから中身が見えなだろうと考えたのだ。誰にも会わないなら、子供ならば化粧を整える必要もないだろう。

だらけポイントが加算された。

持ち物は電源を切った携帯と財布、そして家の鍵。財布は手に持ったまま、そのほかのものは全てコートのポケットにしまった。

それにしても何処を探せばいいのだろうか。

京くんの行きそうな場所が浮かばない。それに、今回の出来事は家出ということでもいいのだろうか。けれど置き手紙もしていることだし親切な家出に分類されるのかもれない。私だったら何も言わずに家を出て、それからどうするかもすっかり考えから実行する。

でも京くんは何を思っただけ私の家に行くと、そう書いたのだろうか。

「京くん」

あまり大きくない声で呼びつつ探していく。ドラマのように声を張り上げて切羽詰まった表情で探そうと思っただが、緊張感がやけに抜けていること、叔母さんのためになると思うとどうしても鬱々とした気分になってしまふのだった。

叔母さんの声が頭に残っていて不快だった。

ああやって何でも泣きつこうとする人が、助けてくれると思っただけの人が、大嫌いだ。

無性にいらいらし始めた。

足元に転がっている空き缶を潰す。

くしゃくしゃになった空き缶をさらに足で潰す。

大人気ないストレスの発散だ。潰れた空き缶をさらに踏みつけて、蹴り飛ばす。

近くを通りかかったサラリーマンが私を見る。視線を感じて恥ずかしくなり、蹴り

飛ばした空き缶を拾い上げて適当なゴミ箱に捨てた。

顔が赤くなっていくのがわかる。コートの襟を引っ張って顔を隠そうと試みる。上手くファンデーションで隠れていければ、それでいいのだけれど。上手くいっているだろうか。

そんなことよりも。

京くんを探さねばならないのだ。

時刻は六時十分。京くんは既にこちらに到着しているはず。探さねば。探して、保護して。何とかしなければ。

「京くん」

先程よりも少し大きめの声で京くんを探す。家を離れて駅の方面に進んでいく。スーツの人混みに隠れるようにしてあの子が居てくれたらラッキー程度に思いながら、駅構内を探す。近くのビルにも入ってみる。賑わう物産コーナーには親子連れと学生が入り交じっている。客を獲得しようとする声と声を張り上げている店員。私の声は埋もれていく。子供の姿はあっても京くんの姿は見えない。

本屋を巡り、服を見繕う気も無いのに店内を見渡す。ひやかしの客には店員も興味がないだろう。私への関心は徐々に薄れていった。

このまま消えて、京くんが探しやすかったらどんなに良いか。

透明人間になりきれない私はひたすら駆け巡るだけだった。ありもしない、いるかもしれないその失望と期待を交互に浮上させながら落胆する。なんて脆い考えだ。と。確固たるものも感じられず、私はただ歩くだけなのだ。まるで人形なのだ。だらけすぎたために、こんなことになっている。キリギリスもそうだった。自覚してからではすべてが遅い。

私もここで凍えてしまふ。

そこで私はあることに気がついた。

私は京くんの顔を覚えていない。

顔どころか声だって思い出せない。

ああ不味いなと思った。声を忘れてしまっても顔さえ覚えていればいいなと思っただけでもなかなかおききりと京くんは出てこない。非常な人間だなあと呑気に考えてしまふ。思い詰め過ぎではなかっただろうか。くつと込み上げた感情が徐々

に引いていくのがわかる。光り輝くイルミネーションを目前にして、一人コートを着込んで硬直している私を人々は無視していく。明るすぎる。目を潰されてしまいそう。

希望はやって来ないけれどなんとか前向きになろうという気分にはなれたので私は改札口に向かって行く。この駅は小規模なので改札口が一つしかない。一つしかないくせに、開放的な出口と季節ごとに装飾の変わる待ち合わせに適した木がある。クリスマスシーズンが近づきそわそわしている人たちの心を駆り立てるには、私の心をちよっぴり前に向けるにはびつたりのものだった。

安直でどうしようもない考えで、私はこの木の近くでいかにも待ち合わせをしていますと言うように振る舞っていればきつと京くんからやって来てくれるだろうと思っただのだ。動く必要はない。私はさながらハチ公の如く京くんの登場を待ち構えていればいだけなのである。ハチ公と違うところは焼き鳥など強請らないし人の賞賛も求めていないし風邪を引きそうだと自分で判断をした時点で家に引き返してしまうことだろう。まあ帰る時ぐらいならも塩ぐらい買つてもいいかもしれない。カルボナーラがあるけれど。

コートのポケットに手を突っ込んでみる。いつも母は口酸っぱく言っていた。コートに手を突っ込んではいけません、と。

今の私はポケットに手を突っ込んでも転ばない大人になったのだ。

「あの」

京くんらしき背丈だけはなんとか思い出すことが出来たのでそれを目安にあちらこちらと視線を動かしているところある学生に話しかけられた。その学生は男性で、見たところ高校生だろう。背負っている浅黄色のリュックに、透明ないかにも学生であることを示す教科書や参考書の類の入ったキャリングケースを持っている。中身は所謂理数系科目ばかりだ。まじまじとそれらを見つめるよりもっと見なくてはいけないものがあることに気づき私は顔を上げる。学生の顔は端的に言ってしまうと見たことがあるような顔をしていた。

気まずい気分になるが学生は私を見つめているし、私も彼を見つめるだけだ。

何もしない攻防戦の後、学生はゆっくりと口を開く。

「美香さん」

哑然とするよりも早く私の口は動いていた。

「京くん」

私が京くんのことを思い出せなくともそこまで気落ちしなかったのは、思い出せなくても仕方がないと思っていたからだろう。思い出せないのは私が親族と疎遠だったからだ。

私は叔母たちが嫌いだった。とにかく一人暮らしが出来るように考えていた。高校生ではまだ早いと言われたので大学生まで待った。それが約七年前のこと。京くんは立派に成長していた。私は本当に親孝行をしない愚か者で私自身は全くそのように感じていないのだけれども、何度も何度もかかる電話に無視をして手紙も読んでいないというのは流石にどこかおかしな部分があるのではないのかと思った。思われていた。とにかく生存だけわかればいいかなと思っていた。

「美香さんはこの七年間どうしたか」

これから帰るのは面倒だと言った京くんの背筋がしゃんとしていることに感心した。電話もせず私の家に帰ることになった。日付が変わった頃に連絡をすれば親族も帰れと無理を言わないだろう。

彼はその昔、私が叔母たちを嫌ったように辟易して家を出たらしい。塾に行くついでに私の家に来ようとしたらしい。住所は流石に教えていたので辿り着くのは容易だったとのこと。もう高校生になった京くんだ。それくらい出来なくては困る。二時間半の旅路など読書をしていればすぐに終わってしまったことだろう。

この七年間私は何もしていなかったような、していたような。改めて考えてみると空洞のような日々を送っていた気がしてしまった。自分の過去を喋るのは苦手だと思う。何度も私は考えているふりをしてきた。

「きつと、楽しかったよ」

「きつと」

不思議そうに京くんは言う。

「思い出せない訳でもないし、話せない訳でもないけれど、とにかく新鮮な日々だったよ」

「新鮮な日々……」

「叔母さんたちに禁止されていたことが出来るようになったから」

「良い子じゃなくなっただけのことですか」

「そうかもしれないね。良い子っていうのに基本も何も無いんだなって思ったよ。禁止されていたことをしていた人でも良い子だったし」

「……ああ、やっぱり」

悲しそうな表情をしていなかったたので私は安心していった。京くんは賢い子なのだと感じる。私はずっと自分が正しいと思っていたから、それでも叔母さんたちの元に居たし、何も出来なかったのだけれども。高校生になって漸く視界が拓けて反抗的になった気がする。それなら京くんも同じ高校生なのだけれども、彼はもつと早くから気づいていたのだろう。

きっかけがあるとするならば私が家を出たことだろうか。

「美香さんが居なくなっただけから他の子たちにも強く当たるようになったんです。あの人たち」

トゲのある言い方をする京くんはやはり賢そうだった。

「美香さんのようにならないように、頑張ろうとしていたんだと思います。けれど、まあ、俺はこうやって美香さんのところに来てどうにかならなかなって思ったんですけれど」

「……私の家は狭いから匿えないよ」

「そういうことじゃあないんです。どういう生活してるんだろうなって思っていただけで、けれどそこにヒントがあったらいいなと思うんですけど」

「……じゃあコンビニでも行く？」

「コンビニ？」

「ご飯を食べよう。私のカルボナーラは冷めちゃってるから京くんのご飯を買いに行こう」

「じゃああれが食べてみたいです。あの、ほら」

「ケースの中に入ってるフライ」

「そう、それ」

「私も一番に食べたかったんだ」

また坂道が近づいていく。億劫だと呼ばれている坂道がやって来る。イルミネーションはもう見えないけれど私たちの心は少しだけ明るい。フライが待っているよ、と言うと京くんは嬉しそうに口角を上げた。

良い子生産機。

叔母さんたちのあだ名だ。私たちはどうしても良い子でないといけない。暴力をされたわけでもない。いつの間にか良い子にされているから、良い子であり続けたいと出来ない。それ以外の方法を思いつかないようになってしまう。疑問は抱くけれど。抱いた疑問を肥大化させないとあの部屋からは出られなかったのだ。

私は鍵を持っている。京くんはその鍵の素材を探しているのだろう。鍵は作るものだ。自分で作るものだから、叔母さんに作らせてはいけない。

「おなか減った？」

「はい」

私も、というお腹の音が鳴ってしまった気がした。ぐう。カルボナーラが待っている。

鉤の話

星井靄

これは以前、父が私にしてくれた話なのだが、随分昔、隣町の木工所に務めていた父の友人が大事な仕事道具の鉋を忘れてしまった。工場の中を見回せば、出入りの大工である老人が独り居るだけで、他の職人連中は出払っている。父の友人はまだその時二十歳を過ぎてほんの数年といったところだった。遙かに年長の大工に商売道具を忘れたなんて言ったらどんなに怒鳴られるか判らない。

「こんにちは」機嫌を探るつもりで、若者は挨拶する。「実にいい天気ですね」

「少し肌寒いがね」

老人は材木の上に腰を掛けて、湯呑を手にしていた。一言返事をしてしまうと、もうそれっきりで、お茶を啜り始めた。ちよつと渋い顔をしているようにも見える。若者は視線をふらふら、指をもぞもぞ、遂には言葉に詰まり困り果てへらへらと笑います。

「あつ、あの、観ましたか。昨日の」頭の後ろを掻きながら、どうにか話題を作り出そうとする。「凄かったですよね。あれは」

老人は軽く舌を鳴らすと、尻のポケットから煙草を取り出しそれを口に寄せる。おい、火。老人は不機嫌そうに言い、唇を突き出して煙草に火を点けるように催促した。若者は慌てて身体中をまさぐるが、ライターもマッチも出て来ない。それもそのはずで、若者は喫煙者ではなかった。

「あの、じゃあ事務所の方から取って来ます」

「もういいよ」

老人はそう呟いて、若者の顔を見上げた。若者は、皺だらけの老人の心臓を握られたように感じ、背中を伝う汗が口の中に流れ込んでくれたらと思つた。それくらい口の中が乾いていた。

「火、火熾します。火、熾せませうから」

若者は傍に落ちていた棒切に跳びつき、手近な廃材に向かって突き立てた。さつさと鉋を貸してくれと頼みさえすればこんな馬鹿なことをせずに済んだのに。老人が片手に持っていた湯呑を板の上に置く音がとても大きく響いた。

「もういいって」老人は立ち上がりながら言う。「マッチくらい自分で取って来よう。座って休んでな」

老人は原始人の様な格好になってしまっている若者の脇を通り過ぎる。足袋が砂粒を擦りつけていく音が、若者の背中を撫でていくようだった。老人は工場の表に停めてあつた軽トラックの扉を開け、助手席の上に投げてあつたマッチ箱を取り上げた。マッチを擦る音、それから扉を閉める音、老人の深い呼吸の音。若者はそれらの音をすべて背中から聞いていた。

「あの」若者は、反転しながら立ち上がる。「実は鉋、忘れまして」

若者の裏返り気味の声に老人は視線をゆつくりと動かした。怒鳴られる。若者はそう思った。しかし、老人は何も言わなかった。

「それで、あの、鉋を貸してもらえませんか」

老人は戸惑つたように見えた。しばらくの間、二人は黙りこくる。お願いします。若者は一押し、声を上げた。口の中は乾き切り、喉が張り付いてしまつている。老人は黙つたまま煙草を吹かした。若者はもう一つ張り上げようとするが咳き込んでしまい、思わず老人の飲み止しのお茶を一気に飲み干してしまつた。

「鉋、貸してもらえませんか」

老人は軽トラックの荷台の方を向き、腕を伸ばした。何かを取り出したように見えた。鉋だった。若者は沈黙したまま老人を見ていた。老人は何だか妙な表情をしていた。煙草をふいと吐き捨て、老人はこちらへ歩いて来る。笑つていようだった。若者はと云えば、今度はぼそぼそと小声で礼を述べた。

「ほらよ」

そう言つて鉋を手渡してくれた老人はやはりどこか恥ずかしそうな、照れたような表情をしてにやついていたのだつた。

その表情というのは、きっとこの話をしてくれた父が浮かべていたのとおなじものだろうと、私は今更になって考えているのだが、果たしてどうだろう。

マルティン・ハイデガー
「ヘーベル——家の友」

伊番鑄市||訳

ヨハン・ペーター・ヘーベルとは何者か。

真直な途、それに拠つて問に答えられ得る途は、このように延びているだろう、つまり私たちがこの人の生涯の歴史を自ら伝えてみせるように。私たちはヨハン・ペーター・ヘーベルの名をたぶん未だ時時小学校において聞く。私たちは教科書で彼の詩の幾つかを学び、そのあれこれをおそらく記憶に留めている。私たちはヨハン・ペーター・ヘーベルの名をまた時として彼の廢物語を読むことに因つて耳にする。

好いことなのは、この詩人の生涯の足取りを知ることだ。と云うのもこの生涯の足取りが按排したのだから、つまりこの人の内に眠っている詩の源泉の湧出を齎したのだ。

ヨハン・ペーター・ヘーベルは一七六〇年にバーゼルに生を受けたのであるが、ドイツ生まれの両親はスイスで召使をしていた。父親は幼いハンス・ペーターの生後わずか一年ほどで没した。十三歳の時この少年は母親を喪つたのだが、彼女はヴィーゼンタールの家に住んでいた。この谷はバーゼルとレーラッハとの間のライン川の屈曲部からシュヴァルトヴァルトの中に入りフェルトベルグにまで通ずる、ヴィーゼ「ライン川の支流」はそこを源にしており、その状と途とをヘーベルは彼の偉きな詩「ヴィーゼ」に詠った。

その後稚きヘーベルはカールスルーエのギムナジウムに入学する。彼はエアランゲンで進学を学び、プロテスタントの地マルクグレーフララントで代用教員になるとすぐにレーラッハで教員となった。三十一歳の折ヘーベルは「今度は教師として再びカールスルーエのギムナジウムに來たのであったが、そこでギムナジウムの教職者と学校長になつたのであり果ては教会の頭職と政治家の職に就き六十六の歳に亡くなつた。彼の生涯の半分余りを故郷から隔たつて過こしたのだつた。

すなわちカールスルーエは彼には既に悠遠であつたのであるが、生まれの——そして幼時の土地の——近さが絶え間無くヴィーゼンタールの人を逆らい難いしらべで律し又彼を喚ぶのである。故郷の大地の活気と力そして地元の——その地の彼に好意を有つ人人の晴朗な氣立てはヘーベルの心と精神に活き活きと宿つていた。彼のたつた一つの生涯の夢、或る村で牧師として暮らしぜひ働きたいということであるが、しか

しそれは満たされなかつた。だが——故郷の呪縛はヘーベルを魅惑していた。故郷への郷愁から『アレマン詩集』は成つたのであつた。それが出版されたのは一八〇三年だつた。ヘーベルは序文に書いている。

「方言がこれらの詩において記されていることが、その名付けを正当化し得る。その方言というのはフリックタールとかつてのズントガウとの間にあるラインの曲がり角にまで及び、さらには様々に変化しながらヴォグゼンにアルプスそしてシュヴァルトヴァルトを越えシュヴァーベンの大部分にまで到るのである。」

我はこう考えるかもしれない、ヘーベルの詩が謂うのは、それが方言詩であるが故に、単に限定された世界についてなのだ。こう考えられる、方言は標準語と文語の暴掠乃至は癩痕であると。その考えは誤りである。方言（口舌）はあらゆる自然のままの言語の秘密に満ちた源泉である。そこから我我皆に向かつて流れ込む、言霊が自らの内に仕舞い込みたるものが。

或る言語の精神は何を隠匿するのか。それが隠すのは地味ではある、しかし神との、世界との、人とそのはたらきとの、その行為と営為との関係である。言霊がその内に隠すのは何か、それは高さ、すべてのものの全き按排、そこからものみな左様に起源を有つ、それが相応しく実を結ぶところの。

この高さと効力は言葉の内に活気を取り戻す。しかし言葉と共に消滅する、言葉が源泉からの奔流無しで済まなくなればたちまちに、源泉とは方言である。

ヨハン・ペーター・ヘーベルは明らかにこのことを識つていた。それを巡つて彼は『アレマン方言詩集』出版前に手短にしたためている、これは確かに留まつていたい。「一族の性質と視野に」「アレマン人を意味する」、しかし同時に「氣高き詩」でありたい。（書簡集、一一四頁）

何であるか——「氣高き詩」とは。それはこのような詩だ、高貴さを有つ、即ち、高き出自、その内に留まり続けその寄与する力の決して涸れることのないものに由来する。相応してヨハン・ペーター・ヘーベルは單なる方言——或いは在郷の詩人では

ない。ヘーベルは世界詩人である。かくして我我は先程の我我の問に対する解答を得た、ヨハン・ペーター・ヘーベルとは何者か。否、我我はまだ答を得ていない。我我が答を得る、それは我我が知った時である、ヘーベルが如何にして偉大な詩人になつたかを。

我我はこの問に対する解答を今は前もって得ておく、我我が口に出すことで、ヨハン・ペーター・ヘーベルは家の友である。

この答はさしあたり奇異な感じを与えるかもしれない、全く理解できないというわけではないにしても。家の友——簡素な名前、だが深く——そして広義の語。不可思議な鋭い聴覚でヘーベルは「家の友」の名を発見した、そしてその名の高揚させる多義を記録した。ヘーベルはこの名を彼に拠つて編纂されたバーデン地方の暦に挿んだ。だが同時にヘーベルはその「家の友」という暦の表題に、彼自身の詩人としての使命を名指す語を認めていた。ヘーベルは一八二一年「大公爵、偉大な総理大臣」宛の手紙に書いた、「素晴らしき考えが心を奮わし」たこと、「ライン地方の家の友なる暦を歓迎すべき慈善の出版物たらしめんこともし可能ならばドイツ全土において最たる暦にせんことをそしてありとあらゆる競争の勝利者たらしめんということ」。

ヘーベルがここでその素晴らしき暦について言わんとしていることは、値する、即ち我我が一語一語熟考するに。

その暦は一冊の出版物に成り得る。それは常に眼に見えて輝き人人の日常を照らし得る。その暦は単に他のあらゆる印刷物のように頭れるのではない、視られた時、既に消え去ってしまうようでは。

暦の出版は「歓迎」でありたい、自由な歓迎、即ち、当時お定まりの、役所から民衆への押し付けではない。

暦の出版は「慈善」でなくてはならない、希望に依つて担われた、読者の幸福と業苦とを授け和らげるようにとの。

それに拠り暦は「最も優れた」方法で狭い国境を越えドイツ全土に語りかけることになる、ヘーベルはその言葉と文章とを最高度の基準で計つたのであるから。それに拠つてこそ彼はその出版の効果を見積もることが出来る。

人が作りうるものは、優れた競争の勝利の賜物である——暦であつても。今日では挿入の新聞がかつての暦に取つて代わりまた滅ぼしてしまつた。前者、挿画というのは、重要なものと不要のものとを同様の平板な局面に詰め込んでしまふ、その場限りのいかがわしい物ともう既に過ぎ去つたものと。後者、暦はかつて地味なものの中に残っているものを指し示すことができ、また度重なる読書と熟考を活発にさせることができた。

しかしながらヘーベルは彼の暦についての素晴らしき考えを有つていた、それに気付かぬままに、今日というこの日を越え或る輝きへと到達した、常に新たに人人の思考と感覚とを魅了するような。このことは如何にして生じたのか。ヘーベルが彼がそうであつたところのものに、つまり家の友になるということに拠つてである。その簡素なもの、しかしそれにも関らず意味深長な語「家の友」それはヘーベルの詩人としてのものとの特質に対しての名である。

詩人の仕事を専ら詩を生み出すことに見出せば、主張しうる、ヘーベルは『アレマン詩集』の公刊後には詩作を止めた。しかしながら辺地の本性と風習を有つ友の為の詩は彼の世界に通ずる詩人性の端緒に過ぎない。この詩人性はヘーベルの暦の物語と考察を通じて最も高貴なドイツの言葉となる。ヘーベル、彼は言葉へのまげゆいまでの近さに生きた、この財について知つていた。彼はその固有の詩人らしい裁量でも素晴らしい断片を選び出した、それは彼が「ライン地方の家の友の暦」において述べたものだ。彼はその財を最も華麗なものに限定し、小さな容れ物を製えてそれを一八二一年にはドイツ語圏全体に『玉手箱』として贈つた。

思考と形成が、どのようして『玉手箱』が言語作品になるのか、我我の感嘆に値する作品に、それはあの身振りである、我我がヘーベルを家の友と認めるところの。しかし『玉手箱』には同時に『アレマン詩集』が止揚されている、すなわち「止揚」とは三段の階を与えられた思考においては、この詩人の偉大な同時代人、シュヴァーベン出身の思索者ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル、その人が「拾い上げる」という語に拠つて思惟するところの語である。

止揚が意味するのはひとつには、地表から持ち上げること、前に置かれていたものを。この手の止揚はしかし外見上のことに留まる、或る止揚に拠つて決定されない限

りは、それというのは保存するというほどのことを意味する。けれどもこの止揚は始めに生産力と耐久性とを受け取る、それが或る止揚から生じる時、次のことを意味する、上昇させる、輝かす、高める、そしてそれに拠つて、変貌させる。その方法に拠りヘーベルは『アレマン詩集』を『玉手箱』の内に止揚した。至る所で玉手箱からは詩の魅力が輝き出ている、詩はその内には特に封入されていないが。

我ががふだん世界について視るものは、人間らしいものと神らしいものについて、詩華らしい言葉に因つて秘密に満ちた高貴さと充盈とに改め鑄られる。改鑄する洗練は高められた言葉に拠つて生起する。しかし高めることは単純なものに向かう。単純なもの内にある言葉は高まり、次のことを意味する。すべてが静かに響く言葉の穏やかな輝きに変貌するということ。このような洗練する語がヨハン・ペーター・ヘーベルの詩人性をしるしづける。

まず我がが十分に熟考するとき、我がは同時に十分かつ後世に影響するように理解をする、賞められる人々エミール・シュトラウス、ヴィルヘルム・アルトヴェグそれからヴィルヘルム・ツェントナーといった人々が幅広く認識していることだが——すなわちヘーベルの書簡にも『アレマン詩集』と『玉手箱』に加え彼の十全な詩人としての仕事の同一性が属しているということ。

単に詩人が、その家の友としての固有の本質を漸漸明瞭と目に留めた上きつぱりと纏えば、この手紙を書き得るのである。

だが、我がはまた問う、このものは何者か、家の友とは。何の方法でヘーベルは友であるのかまたどのような家に対してなのか。

さしあたり我がは家について考える、そこには田園と都市の人人の住まう。今日我がはまったく余りにも簡単にしばしば止むを得ず家を部屋の配置ということで表象してしまう、そこには人間らしい生活の明暮が過ぎ去つてゆく。家は直ぐにただの住まいの為の容器になってしまう。だが家ははじめて住まいを通して家になる。建築とはしかし、それを通して家が建造される場所のものであり、それというのは、それが実際にそうであるのは、ただ、事前に住まわせることに相応しく定められているときであり、そのさせるというのはその際にはより根源に近い可能性を住まうことに對して喚び覚まし与えるのである。

我がは「すむ」という動詞を広く本質に對して十分に考えよう、仕方を示すのであるから、人が地の上と天の下を誕生から死没までの彷徨を遂げる仕方。この彷徨とは形はさまざまであり変貌豊富である。至る所でしかし彷徨は住まうことの主脈は天と地との間の、誕生と死没との間の、歓喜と懊悩との間の、作品と言葉との間の人間らしい滞在である。

我がはこの襲の多い間を「世界」と名付ける、何故なら世界は家である、死すべき者の住まう家なのである。それに対して個々の家、村、街はそれぞれ建築物である、自らの内とその巡りに襲の多い間を取り集めるような。建築物はまず大地を住まわせる地域として人人の近きに持つてきてそして同時に隣り合つて住むことの近さを天の広さの下に立てる。ただこの点において人は死すべき者として世界の家に住み、使命の内立つ、天上のものに家を建てそして自らの為の居所を建てるといふ使命の内。

家に、世界であるところの家にとつて、家の友は友である。彼は完全に広大な人間本性の住まい方に好意を抱く。彼の好意は根源に休らうのだが、それは常に間尺にあつた属し方で世界とその構造の内に休らうのである。それについて我がは家の友の『玉手箱』の「世界構造についての觀察」を見出す。他にも、家の友は觀察を蒔き入れた。彼は箱の中の財を能く考え美しく配した。

それだけでなく、玉手箱は「世界構造についての一般の考察」をもつて始まる。家の友はまずはじめに「太陽と大地」を眼の前に持つて来る。その後には月の觀察が続く。それから無邪気さと冒険心、真面目さと狡猾心の行いとそれぞれの人の種類についての物語の合間には星星が輝く。まず、二つの箇所に分けられる、惑星、それから彗星、終わりには目論見が有つて恒星が。

ただ有り得るのは、確かな正当性を持った上で、こう謂うことだ、ヘーベルの世界構造についての觀察は彼の時代の趨勢に従つただけだということである、啓蒙主義に忠実だった時代に。その当時始まりつあつた近代自然科学の認識は避け難かつた。それらは自然についてのより好い知として人人に伝えられようとしていた。啓蒙時代に関するこの確認は慥かに正しい。だがすっかり見誤つている、家の友たるヨハン・ペーター・ヘーベルが世界構造についての觀察をもつてして何を胸の内秘めている

かということ。何に向かつてヘーベルの胸臆は立っているのか、我我はようやく気付く、我我が知れば、家の友が本当は何者なのかを。

つまりはこうだ、驚くほかないが、ヘーベルである道理は無いのである。はたしてさもなければ誰か。答はヘーベル自ら与えている、世界構造についての観察の一種独特な箇所において。我我はこの箇所に傾注しよう、そうすれば我我は世界構造を思惟するように決定付けるものをただそれだけで読み取る。当該の箇所は月についての観察の終わりに見出される。以下の通りである。

八番目にそして最後に、さて実際なる月は何を為さなくてはならぬのか。——
答。地球の為すこと。事程左様、月はその穏やかな光をもって照明する、日光の反射で、我我の夜を、そして見守る、少年が少女に口づけするように。月は我我地球の本当の家の友であり最初の暦作者である、そして最高の夜警總監である、他の者が寝静まるその時には。(世界構造についての観察 月、著作集第一巻、三二六頁以下)

地球の本当の家の友は月である。誰が敢えてしようか、あえかなそしてその場合避けようもなく胡乱な言葉を以つて口に出すことを、ここにおいて家の友の本来性として形になろうとしているものを。

その輝きに依つて月がするように、この世の家の友ヘーベルは彼の言葉に拠つて光を齎す、それは慥かに穏やかだ。月は我我の夜に光を齎す。しかし光、月が齎す光は、それ自身で点したのではない。光はただの反射である、月が事前に受け取つただけの——太陽から、その輝きは同時に地球をも照らしている。

太陽の反射、それは月が和らげこの地球に照らし返すものであつて、このような光輝の如く詞に対しての比喩である、詞は家の友に承諾されたものであつて、それをもつて彼はまた照らされるのだが、彼に承諾されたものを彼ら、彼とともに地上に住まう者らに、語り直すのである。

すべてのうち、家の友が言うことのすべてのうちで、彼は本質を為すものを守る、人間が住まう者としての信任された本質を為すもの、彼らが自然余りにもやすやすと寝過ごしてしまうものを。

家の友は最高の夜警總監である、月がそうであるように、夜通し目覚めている。彼は住まう者の確かな安らぎを監視している、驚異や邪魔に注意しているのである。

最初の暦制作者として月は時間の有つ時時刻刻の経過をあらかじめ指してみせる。詩情ある詞は死すべき者どもに対して生から死までの道程を先んじて往く。

家の友は見渡している、少年が少女に口寄せる様に。その物見は妙なるもの、野次馬根性から見惚れたりするのではない。家の友は見渡している、恋する者に穏やかな光が満たされるのを、それは月の如きものである、それはただ地上なるものでも、ただ天空なるものでもなければ、この双方を兼ねたるもの、これはしかし根源において不可分なものである。

月の眺望にヘーベルは家の友の本質を読み取らせる、家の友の道程と滞在、身構えと身振りは唯一のものであり、独特の態度である、同時に目覚ましい輝き、それはすべてのものを穏やかな、幽かな光に入らせる。

これに相応しいのは、ヘーベルが家の友としての己自身について言うことだ。この者はそこかしこに「小さな黄金の粒」(著作集第一巻、九九頁)を彼の物語と観察に置き入れている。ライン地方の家の友はせつせとラインの流れ往き還りして、数多の窓を覗き込む、見咎められることなく、多くの実直な人といくらかの安息日の路程を過ごす、そして悟らせない、彼の何であるかを。

それで家の友は多くのことをその折に考える、彼が想い寄せる読者に語ることに際し、だが本当のことは話さないでおく。それはかつての物語の終わりに述べられている(著作集第二巻、一六四頁)「家の友は何かをその折に考えるのだが、彼はそれを話さない」。もちろん家の友は知つてもいる、その詞が何処に語りかけているかを、つまりは「世界と生命の偉きな年の市に」。「ひととははじめ対して気に留めない、いつも或るものが往き去り、また訪い来るように、初めとは全く違つた人人に自らを見出すまでは」。

家の友はまたはつきりと識っている、如何に本質から死すべき者の生が詞に因つて定められ捉われていることを。一八〇八年九月の或る手紙にヘーベルは書いている「私達の人生の大部分は好むと好まざるとに問わず詞の中を彷徨いそして私達の最大の闘争とは……詞の闘争」(書簡集、三二二頁)。

何ら不思議は無い、家の友がより重々しく、我我の思う以上に重々しく、担っていることは、この詞の闘争を彼の詞を通して正しい方法で耐え凌ぐのに。

ヘーベルはかつてユステイヌス・ケルナー宛に書いている（一八一七年七月二〇日）

「貴方は必要であるか御存知でありましょう、或る一定の読者に言うべきことを相当に正しく彼らの生活の真実と明瞭との裡に横たえることが」……それから、我我は引こう、それに「気にも留められずに騒がれもしない」ままでいることが（一八一一年八月一〇日、書簡集 五六七頁）。つまりこれが家の友の業である。その名にヘーベルはその時代もう一度解釈している、彼はこう書いている（ユステイヌス・ケルナー宛、一八一七年一〇月二四日、書簡集 五六七頁）、この名において「当然心から読者とともに語りそして心置きなく熊を繋いでおける〔嘘を吐ける〕のです」

控えめな詞の裡に、言うべきことを云わぬままにしておくということの裡に、家の友の友情が読む者に注がれる。その詞の内に家の友は死すべき者の住まいへの回向を見つけ出し保つ、それに拠って、彼は世界たる家の内に立ち寄りしかも客であるのだ、そうではないかのようにありつつも。

「家の友」——それは遙かに予見し同時にその本質を蔽っている名であり、我我が普通ひとりの詩人に付ける名である。

詩人は世界を詞の内に取り集める、その詞は穏やかで控え目な輝きに留まる、そこに世界は顕れ、それらが始めて眼に留められたかのように。家の友は指導しようとも教育しようともしない。彼は読者に委せる、家の友が傾注しているものについて、我我とともに語らんがために。

どの様な対話を家の友は有っているのか、世界たる家の、心の中に。何について家の友は語ろうというのか。答、それについて、彼自身が『玉手箱』においてその詞を始めている。それは「世界構造についての普通の諸考察」である。その序文をヘーベルは次の文で締めている。

「このように今家の友は或る説教を為そうと考える、まず地球についてそして太陽について、続けて月について、その後には星星について」

説教とは。いやはや。だが我我は次のことに注意しよう、ここで説教をするのは誰なのか。家の友、司祭ではなく。しかし詩人、説教をする詩人というのは、劣った詩人だ。次の場合を除いては、我我が動詞 *predigen* をより一層考え込んで理解する場合を。*predigen* はラテン語の *praedicare* である。それはつまり、何かを予め言うこと、それに拠って賛えることでありそうやって言うべきことをその輝きの内に現すのである。このような「説教」は詩人らしい詞の本質である。

したがってヘーベルの「世界構造についての観察」は詩人らしいものである。これは大胆な主張である、と言うのはヘーベルの意図と発言とは反対のことを言っているように見える。ヘーベルはだが先述の観察をもって彼の暦の読者を世界構造についてのより好い知識へと導く、彼らをそのいい加減な無知から解き放たんと。

『玉手箱』の最初の頁は次の文章で始まる（著作集第一巻、二六四頁）。

「読者諸賢、皆さんがその馴染み深い山山と樹樹とに囲まれて故郷にあって家族の傍に座し、或いは驚亭にあつて一杯の酒に与る折には、気分好く、そしてまさにそれ以上惟うことはないでしょう。しかし朝早く太陽がその徐かな花やぎの裡に昇る頃、皆さんは知らない、太陽が何処へ行くのか、そして太陽が夜の間その光を何処に隠すのか、そしてどんな秘密の小径を太陽はその昇口の山岳に再び見付け出すのか。或いは月が或る頃には蒼褪めて弱弱しくある時、また別の折には夜の間圓く豊かに逍遙する時、皆さんはまたもや知らない、いづれにそのことが由来するのかを、それから読者が空に満ちる星を仰ぎ見る時、或るものは他のものに較べ美しく愉しげに燦めいている、皆さんは考える、それらが全体それ自身でそこに在るのだろうか、だが本当は知らないのだ、それらが何を欲するのかを。好き友よ、次のことは賞められたことではない、ひとがそのような何ごとかを見ていながら、何ら問わないことは、それが何を意味するのかを」

家の友は彼の読者に傾聴させようとする、読者によく考えてもらおうと、自然の出来事と状況の内に明示されている何かを、我我の住まう世界を一貫して統べている何

かを。それゆえ彼は自然を讀者に表す、近代自然科学の「博物学者や天文学者」とりわけ「実直なコペルニクス」が表象するように、数、図形と法則において。我我は慎重に言おう、家の友は自然をその学問上の計算可能性においても示す。しかし彼はこの自然理解に我を忘れる。家の友は随かに計算可能な自然の上に視線を導きはするが、だがそのように考えられる自然を同時に自然の「自然本性」の裡に取り戻す。このような自然の自然本性はその本質において、それゆえ歴史に関しても近代の自然科学の主題の意味における自然というものよりも一層古めかしい。自然の自然本性は介在なしに自然それ自体から生まれ出ることはない、それがむしろ特に認められるのは、かつて古代ギリシヤの思索者が「フュシス」と名付けたところのもので、すべての存在者の現在と不在の内の往き還りである。

自然の自然本性はあの太陽の上昇と沈降、月の、星の、その昇降が直接住まう人と呼び掛けるのであり、世界の秘密を話し掛ける。世界構造についての学問の解明において太陽がコペルニクスの如くに考えられたからといって、太陽は同時にあるがままの自然の内において続け即ちヘーベルの二つの詩では「妙なる婦人」、「みな光輝と暖気とをもとめ」、「みなが恵みを乞い」、「だが善良であり親切である」(燕麦、著作集第一卷、一〇四頁以下、夏の夕べ、著作集第一卷、七八頁以下)。

ヘーベルはここで太陽を或る農夫に変えているのか、或いはその女性とすべての人間性の単純さが初めて現れてくるのだろうか、我我を太陽とあるがままの自然の天体とがその静かな光彩をもつて照らす時には。

ゲーテは彼のヘーベルのアレマン詩集の批評で書いている。「著者は自然物を百姓へと変じているつまり土俗化している、最も素朴で、美しい方法で、一貫して万有を、即ち風景、その内でひとはいつも土地の人を見付ける、それをもって我我の高められ晴朗なものにされた物語を発見する」。

ヘーベルは万有を土俗化する。この部分はぎこちなく響く、だが好ましく思われる。それは或る問いに触れる、その問はまさにゲーテの後の詩作と思索とを絶えず動かした。

ではそれらは何であるか、我我に、はじめて本当に我我において今日差し迫った問を評価する必要があるのだ。

それは問われるべきことであり、さしあたり計測不可能なものを見通し得ぬものへと高まり我我の時代を拉し去る、我我は何処へ行くのか知らない。

それは問われるべきことである、我我はそれに関して今日において一度も適切な名前を知らないでいる、科学の技術で支配可能な自然と馴染みある自然らしい自然、同様に歴史を通して規定されてきた人間の住まいたる自然が双つの疎遠な区域が相互に区切られるようにそして絶え間ない加速をもってますます互いに離れて驟り去っていくようであるということ。

それは問われるべきことである、自然の計算可能性が世界の秘密に対する唯一の鍵であるかのように称えられていることは。

それは問われるべきことである、計算可能な自然が誤解された真実の世界としてすべての思いと努めを引き裂き人間の表象を単に計算するだけの恣意へと変化硬化させてしまうこと。

それは問われるべきことである、自然らしい自然が空想の産物たる無へと落ちぶれてしまひもはや全く詩人へ呼びかけないこと。

それは問われるべきことである、詩がそれ自体標準と成り得る本当の形態で有り得ることはないということ。

これらはすべてこう言えよう、我我は世界たる家を彷徨う、家の友はそこに見当たらない、それはつまり、同じ方法と強度で仕上げられた世界構造とより根源に近い住まいの為の家としての世界と両方とに心を注ぐ家の友が。家の友が欠けている、彼は自然と或る新しく経験される自然の自然本性の開かれた秘密の内に元通りに匿してしまふ。

この家の友は随かに普遍を土俗化する。しかしこの土俗化は建てることのわざを有っている、人間の根源に近い住まいにずっと思いを馳せているようなわざだ。

それに関しては建てる者が必要である、それは次のことを知っている、人間は原子力に依つては生きない、せいぜい没るばかりか、その本質を喪うに相違なく、さらになお、原子力がただ平和な目的に供せられその目的が人間のすべての目標設定と使命とに標準を与えるようであろうとも。それに対して建てる者は熟慮する、単純な生

は、ひとが生きるといふような単なる生は、住まうことならぬ。人間が住まうのは、住む時に、ヘルダーリンの詞の謂うように「詩心もて……この大地の上に」。

ヨハン・ペーター・ヘーベルは家の友の姿をした詩人である。我我現代人は、勿論もはやヘーベルに百五十年前経験した世界には還れず、またその時代の無垢な田園にも、そして偏狭な自然についての知の方へも。

しかし我我はその上で気付き得る、人間らしい住まいにある詩趣あるものが詩人を必要とすること、詩人は高く広い意味において友である、世界たる家にとつて。

我我は前もつて眺めることが出来る、何処をヨハン・ペーター・ヘーベルが眺めるのか、彼が家の友としての詩人を惟う時に、家の友とは世界たる家を人間の住まいに對して詞へと導くものである。

「詞へと導く」——我我はこの言い回しを日常用いる、表現する為に、なにかが討論される為に提示され話し合われることを表現する為に。我我はだが「詞へ導く」という言い回しを慎ましくもこの詞の重さにしたがつて考えるなら、このことは深い意味を得る。それから「詞に導く」ことは意味する、かつて語られなかつたこと、言われなかつたことを初めて詞に仕上げそして長きに亘つて隠されていたことを詞に拠つて著すことを、この観点にしたがつてこの詞をよく考えてみれば、その時には姿を現す、詞が自らの内にすべての本質を為すものの財を仕舞っていることが。

ヨハン・ペーターの『玉手箱』の内に隠されているものは、今日まで極少数によつてのみ全体評価されたばかりである。ドイツの書き言葉、ヘーベルの観察と物語の内に語られているもの、それは簡素で、明白な、同時に魅惑するようであり熟慮すべきものであるが、その都度書かれてきたものだ。ヘーベルの玉手箱の詞は大学である、まさにこの詞で語られ書かれるべき規範たるような。

何処にヘーベルの詞の秘密はあるのか。技巧を凝らした文体の狙いにも、その意図にでもなく、最も能う限り民族性をもつて書くことの内にある。玉手箱の詞の秘密が置かれているのは、即ちヘーベルが為し得たことに、アレマン地方の詞を標準語と書き言葉に編み込んだことに。この方法で詩人は書き言葉を純粹な方言の富たる反響として響かせる。

我我は玉手箱の詞をまだ聴くのだろうか。概して我我の詞はなお我我に関わつてくのか、我我がそれらを聴くように。或いは我我にとつては自らの詞は消え去つていくのか。事実そうだ。我我のかつて語つていた詞、根源に近い神さびたもの、それはますます忘却に沈んでゆく。ここにおいては何が起きていくのだろうか。

何時でもまたどのようにでも人人が語るうとも、彼が語るのはただ、彼が以前既に詞に聴いたものである。その際詞の聞き流しもまた一種の聴く技術である。人間はかような詞から口に出す、つまり彼の本質が語られるところの詞から。我我はこの詞を名付けて謂う、即ち母語と。

歴史を通して自然のままである詞という観点において——つまりこれは母語であるが——我我はこう言つて可いだらう、本当には詞が語るのだ、人間ではなく。人が初めて語るの、彼がその都度詞に對して語るといふその点においてだ。

今の時代においてはしかし結果として日日の語りを書くことの忙しさと日常性が詞に對する別の関係をいっそう明晰に優勢に導いている。我我が意図するのはつまり、詞もひとえに、すべての日日の物事のように、我我が扱う物事のように、或る器具、慥かに伝達と情報との器具であるということ。

このような詞についての表象は我我にとっては周知のものである、我我はその不気味な力にほとんど気付かない。そうこうする内にしかしこの不気味なものはつきりと明るみに頭れつつある。情報の器具としての詞についての表象は今日極限へと迫っている。ひとはこの出来事についての知識を有っている、しかしその意味をよく考えない。ひとは知っている、現在電子頭脳の建設に関連して計算機だけでなく、思索と翻訳の機械までもが建造されていることを。すべての計算が狭いそして広い意味において、すべての思索と翻訳が言語の基盤において動いている。先述の機械に拠つて言語機械が実現したのである。

計算と翻訳の機械の技術設備における言語機械は録音機械とは異なる。このことを我我は或る機器の形式において知つていて、つまり我我の話を録音し再生する形式であり、したがつて詞の語りにはまだ介入してはいない。

それに対して言語機械はその機械の活動と機能とに拠つて既に我我の可能な言語仕様の技術を規制し量定する。言語機械は——何よりまず今ようやくそうなりつつある

のだが——一種の方法である、現代の技術が言語のもつわざと世界とを意のままにするような。

その間に今なお露になりつつある外観があるのだが、人が言語機械を制御しているかのような外観である。しかし真相は、言語機械が言語の操縦を担いそのように人間の本質を制御しているのである。

言葉に対する人間の関わりは変化の内に理解される、その射程は我我には測り知れない。この変化の過程はまた直接には止められない。その上最大限の静けさの内に進行しつつある。

慥かに我我は認めなくてはならない、言語が日日伝達の手段として現れそしてこの手段が普段の生活の関わりあい用いられるということ。だが普段のものとはまた別の関係がある。ゲーテはその別のものを「より深い」と称びまた詞について言っている。

「普通の生活の内において我我は詞をもつて乏しく進む、我我はただ上辺だけの関係を表すだけだから。より深い関係が話題となるや、たちまち別の詞が生じる、それは詩趣あるものだ。」(著作集、第二部、第十一卷、ワイマール、一八九三年、一六七頁)

このような人の現存在のより深い関係についてヨハン・ペーター・ヘーベルは述べている、或る時に書いたその時に。

「我我は植物だ、——我我が心好く認めようと認めまいと——根をもつて大地の上に立ち上がらねばならない、花やいで実を結び得るように。」(著作集第三卷、三二四頁)

大地——この詞がヘーベルの文章において意味するのは全体、眼に見えて、耳に聞こえ、感じ取れるものとして我我を支え取り囲み、そして励まし鎮めるもの、つまり可感のものである。

天空(空)——この詞がヘーベルの文章において意味するのは全体、我我が知覚するもの、しかし感覚器官を伴わぬもの、つまり非可感のもの、こころ、精神である。完全な可感物の深さと果敢な精神の高さとの間にある道と杣とはしかし詞である。

どうしてか。言葉の中の語は語音において鳴り響き、字形において光り輝く。音と字は慥かに可感物である、だがしかし可感物、その内にその都度その都度意味は音となり顕れる。語は可感の意味として大地と天空との間の活動空間を横断する。言葉は領域を開け放つ、人が大地の上と天空の下とに世界たる家を住まうその領域を。

ヨハン・ペーター・ヘーベル、詩人、明るい心を有ち道と杣とを彷徨した、我我が詞を経験し得るものとしての道と杣とを。我我には可能だ、我我が友との友情を求めらば、詩人としてそれ自身世界たる家にとつての友人である友

ヨハン・ペーター・ヘーベル、即ち家の友と共に。

訳者後記

ここに訳出したのは、マルティン・ハイデガーが一九五六年五月に行った記念講演の記録である。なお、今回翻訳にあたっては、ネスケ社版のテキストを用い、理想社版ハイデッカー選集を大いに参考にした。



二〇一五年度

リレー小説

「先輩、先輩」

眠たいのだから静かにしてくれと言おうとした矢先、鼻の近くに何か異臭のするものを近付けられていることに気付いた。目を瞑ついてもわかつてしまう。酸味のある物体、それでいて湿っていて、どうしたって生臭い。

魚だ。魚のマリネ、らしきもの。

やめてくれと言わんばかりにそのマリネらしきものがあるだろう位置を手で払う。人間の感覚というものは面白いもので、すぐに退けることが出来た。視覚なんて大したことないな。だって目を瞑ついても大丈夫だもんな。まあ、日常から見えているからなんの自慢にもなりやしないけれど。

「食べてくださいよう」

何が食べてくださいだ。可愛げのない後輩は、声だけが可愛らしいという憎たらしいものだった。容姿もなかなか良く、家庭的らしく、清楚。知っている情報はこれくらいで、あとは自分によく知っているという程度だ。

しかし、どうして先輩にマリネなどひつつけようとしたのか。なかなか理解に苦しむ。昼下がり、それでいて曇天、晴れやかな気持ちにもなれないので眠ろうという算段を、彼女は阻止していく。ああもう。眠らせてくれ。ただでさえこれから忙しくなるのに。

自分はぐっと、自分に掛かっている毛布を抱きしめるようにして抵抗の姿勢を取る。まだ目は瞑つたままだ。開けたら負ける。開けたら、駄目だ。

すると彼女は「わかりました」とだけ言って、どこかへ行ってしまったようだった。よし、それでいいと自分は安堵する。安堵というか、とにかくこれから眠れるのだと思うと嬉しくて仕方がなかった。自分の仕事まで、眠るのである。

今日はいわゆる学園祭というやつだ。実行委員になった理由はお祭り騒ぎが好きだから。だのにどうして休もうとしているかだなんて、人間休めるときに休まなくては

いけないという理屈できつとどうにかなつてくれるだろう。そうなつてくれることを望む。そうしてくれないと、疲れてしまう。狙うは後夜祭。友人がリーダーを務めるバンドの演奏に合わせて激しいヘドバン。お祭りの間は何をしてもいいのだ。自分の歴史が少し黒くなつてしまいうリスクさえ負えば。はてさて。彼女は本当に諦めてくれたらしい。嬉しいことだ。もつと眠ろう。眠つて、後夜祭に備えよう。

眠るときには羊を数えたほうがいいと誰かが提唱しているものの、自分はそれを実践することがない。数えるのは専ら本だ。自分の部屋にあるだけの本を、記憶の限り数えていく。たいいてい最初に数えられるのは買った方がいいもの読めていない本ばかりで、苦しい思いをしてしまう。だが、早く眠ればそれだけその本たちを読むことが出来るとも考えられる。プラス思考は行動の元気だ。今日も活力を得るために眠ろうじゃないか。

静寂。そして強烈な爆音。

「おはようございまーす!」

やってきたのはやはり後輩だった。糸井優。彼女は自分の後輩だった。彼女は今まで以上のものを放っていた。怒号——彼女はそこまで下品な人間ではない——ので、声。大きな声で挨拶をしてきた。自分が彼女を、足音を察知して、それまでの数秒もしない間に距離を詰めて、耳元で叫ばれた。

「うっ……」

「呻いても駄目ですよ。さあ起きましよう、先輩。長机に毛布だなんて、そんな寂しいお布団から抜け出して、楽しい学園祭をさらに楽しくしまししよう」

糸井の言っていることは正しかった。彼女はきちんと学園祭実行委員の役目を果たせと言ってきているのである。ごもつとも。寝ている場合ではない。

あくまでも抵抗しようとする自分は毛布を掴む。学校の倉庫で眠っていた代物は埃だらけだが文句は言うまい。彼女は毛布を掴む。剥がそうとする。

「いいか糸井。眠っているんだ。眠っている人の邪魔はいけない」

「話していますよね、話しているのならば起きていますということになるんじゃないでしょうか。さあ起きましよう。学園祭はどんどん過ぎ去ってしまいます」

「正論を振りかざしても俺は眠る」

「おはようございます。朝です。楽しい朝です。希望の学園祭です」

彼女はどうかやう口も上手いらしい。ああ言えばこう言う。まだ正午にもなっていないというのに、この口の回転率。なかなかのお達者であると感じた。昔であったお達者は、確か中学校の頃で、クラス内の委員会決めの話し合いを、クラス全部を使つての漫才仕立てにした大ばか者だった。彼女はそれと種類が異なるがその素質があると見た。

巻かれてしまう。巻かれたら終わりだ。自分は今、毛布に巻かれているけれども。

出来ることなら助けを呼びたい。耳元では可愛らしい声が出ているのだから、そりゃあその声の主が見てみたいいなあとと思うのだ。実際、糸井の顔が思い出せなくて困っている。糸井はどんな顔をしていたのだか……名前はきちんと憶えているのに……だのに思い出せない……痒い。むず痒くて、目を開けてしまいたいそうになる。

だがそれはしない。絶対にしない。睡魔は誘っているのだし、その手に乗らなければあと十時間程度の労働が待ち構えている。アルバイトでは日ごろ五時間程度しか働いていないのに、どうして十時間も働かなくてはいけないのだ。楽しいことはいいけれど、お目当ての後夜祭はその、残り一時間辺りか。そこに全力をかけるべく、こうして実行委員に潜入しているのだ。仕事をしに来ているのではない。そのために居るのだ。お祭り騒ぎの一瞬のために。

「先輩、起きてください」

頬被抓まれる。その瞬間に、うつすらと開いてしまった。

電気だ。蛍光灯が見える。灰色の天井に、蛍光灯が六つあった。それは、糸井の奥に見えていた。糸井を直視することは出来なかった。彼女は長い長い黒髪を一つにまとめ、赤いリボンをつけていて、カラーコンタクトをしていた。青いカラーコンタクトだった。そして、何故か教会の——西洋の、あれだ。シスター。シスター服を着ていた。

「……コスプレ？」

これはどのようなシチュエーションなんだ。

「おはようございます、先輩」

2

ぱちりと朝顔のように目が開いた。思い出した。そうこの顔。大きくて切れ長な目に、形の良いふつくらとした唇、スツと通った鼻筋、キレイな卵型の輪郭、そして大輪の花が咲いたような華やかな笑顔。そういえばはしのえみにも少し似ているような。ああ彼女だとまだ半分夢の中にいるような心地でその可憐な姿をただぼんやりと眺めていた。

眠気のため蚊の鳴くような声で「糸井さん……」と呟いたら、彼女はさつきよりも更に元気な声で「はい。なんでしょう、先輩」とあどけなさの残る口調で、そしてあの見惚れるような笑顔で言ったのだ。

「ここ芸部だよね？　なんでシスターのコスプレなの？」

精一杯の嫌味を込めて聞いてみたら、糸井優はやはりさつきの調子で「だって面白くないもの」と言った。これが男低くて遅い声だったら拳骨をくらわすところだが、彼女のカワイイ声に免じて許すことにした。布団のあたたかさは人間の感覚を麻痺させるのだろうか。今日は彼女が愛らしく見えて仕方がない。コスプレの魔術なのだろうかと小林秀雄の文章みたいに小難しいことをぐるぐると考えていた。そもそも僕はなぜかこの後輩にそこはかとなく苦手意識を持っていた。「嫌い」ではなく「苦手」。彼女の前に立つと何とも言えない居心地の悪さを感じる。それは決して不快なものではないのだが。この気持ちを深く追及することもできるが、今日は学祭。楽しいことを考えよう。

3

しかし悲しいかな、目下のところ楽しいことというのは後夜祭に控えたバンド演奏なのであって、それはいままきに課せられようとしている労働の後にしかないのである。というか、だからこそこうして空いた時間を潰すべく惰眠をむさぼっていたのであるからして。

「だいたい楽しいことだったら空想に遊ばせておくよりも実際に行ったほうがもっと楽しいに決まっているのに、それを代償しようとして空想に走るのだったら虚しいばかりだ。」

「そもそも、そういう考え事にふける猶予をこの後輩が与えてくれるとも思えなかった。案の定、一向に起き上がろうとしないこちらに痺れを切らして糸井は身を乗り出し、両肩を挿んで揺すってくる。おいやめろ、そんなことされたら眠れなくなるだろうが。」

「ねえ先輩、起きてくださいよう」

「断る。あとそれやめろ」

「やです。そしたら先輩、二度寝しちゃうでしょう」

「見抜かれている。」

「愛らしい顔をふくれさせてこちらを睨む後輩の顔が視界いっぱい広がっている。

美人に睨まれるというのはなかなか嬉しい構図ではあるものの、相手がこの糸井だというただ一点がすべてを台無しにしている。だから慌てることはない……はずなのだが、どうしてかさつきから動悸が収まらない。というのも、こいつのシスター服、デザインが雑なせいか襟元の白い布が存在しておらず、そんな格好で身を乗り出してきているもんだから「見え」てしまっているのだ。いや、なにがとは言わないが。ついでに言うと男が寝起き端には人前で立ち上がれないのは男に生まれたなら羞恥の……もとい、周知の事実なのだが、そのせいもあって意地でも立ち上がらないという決意が心の中で芽生えていた。

「委員会ならひとりで行けるだろ。俺はここで寝るのに忙しいんだ」

「こつちこそお断りします」

4

「そもそもなぜ、糸井はこれほどまでに僕をかまうのだろう。後輩といっても、僕と糸井さんはそこまで接点があるわけではない。ただ単に、同じ実行委員に所属している先輩と後輩だというだけだ。何故僕に、それもわざわざ眠っているような奴に。」

「それはたぶん、先輩が酸っぱいにおいを発しているからじゃないでしょうか」

「それは糸井さんがマリネを近付けてきたからじゃ」

「それになんか、少し生臭い」

「だからそれは」

「糸井さんは僕の言葉をさえぎって、さらにマリネを近付けてきた。やめろ、生臭い。」

「だって先輩が食べてくれないから」

「だいたいなんでマリネなんか」

「屋台で販売してたんですよ。それも長蛇の列で。結構人気で、並んだんですよ」

「そこまで苦労したんなら自分で食べればよかったです」

「先輩に食べてほしかったんです」

「断る。」

「僕はマリネアレルギーなんだ」

「ずいぶんとピンポイントですね」

「ほっといてくれ。」

「今日は本当にツイてない。本当はこのまま緩やかなまどろみの中に落ちながら、惰眠をむさぼり続けていくはずだったのに。お目当てのバンドまではあとどれくらいだ？ 正確な時間は確認しないとわからないが、たぶん、まだずっと先のはずだ。それまで糸井の相手をし続けろというのなら、勘弁してほしい。」

「あーあ、せっかく張り切ってきたのに、張り切り損だったなあ」

「糸井がつまらなそうにつぶやいていた。」

「マリネも失敗だったし。それに、シスターのコスプレにも全然興味を示してくれないんだもん」

「悪いな、僕は敬虔な仏教徒なんだ」

「もともと、下半身だけはクリスマスチャンらしいが。」

「せっかくの大学祭なのにさみしくはないんですか？」

「僕のそっけない態度にもめげずに繰り返した。」

「お祭りって、騒ぐもののはずでしょう？」

楽しみ方だつて選んだつていいはずだ。

「僕は後夜祭が始まるまで寝て、それから後夜祭に目いっぱいはいしゃぐ。それが僕の楽しみ方なんだ」

「つまらないですね」

「つまらなくても結構。後夜祭までは寝かせてくれ」

「後夜祭ではなくにをするんですか？」

「友達がバンド組んでてさ。演奏するらしいから行ってみるだけだよ」

「へー、その人上手なんですか？」

「さあね。ただ、行かないとどやされるから」

割と楽しみにしているなんて言うのが、少し気恥ずかしかった。

友人の組んでいるバンドは、なかなか人気があるらしかった。ピーク時になると、観客がアマゾンのマングローブみたいに生い茂る。僕もその木々の中の一本に甘んじて間抜けな顔をさらしているのだが、それが、僕の中で現在進行形で黒歴史を形成している。

ただし友人のほうは、その人気を獲得するまでに、相当ハードな、それこそブラック企業さながらの重労働を強いていたらしいが。

「楽しそうですね」

「さあ、どうだろうな」

「私もいつしよに行つていいでしょうか」

「始まるまで寝かせておいてくれるなら、好きにすればいいさ」

「じゃあ、そうします」

腕枕の上に置いていた頭が、思わずずれ落ちそうになった。だつてさっきまで何と少しでも僕を起こそうと画策していたというのに、こんなにもあっさりと手を引こうとしているというのだから。

「僕を起こしたくはないのか？」

「別に、それが私の目的ではないので」

「じゃあさっきまでそんなにしつこかったのは何なんだ」

「それは秘密です」

糸井は人差し指を自分の唇にあてた。僕は大仰にため息をつく。彼女が何をしたいのか、僕にはさっぱりわからない。けどまあ、これ以上睡眠の邪魔をしないというのなら、僕もこれ以上彼女にかまうこともない。

「後夜祭が始まるまで、私もここにいていいでしょうか」

「だったら始まる時に起こしてくれないか？」

「はい」

糸井の答えに、僕は安心して睡魔に身をゆだねた。

「先輩」

なんだ……。

「寝る前に一つだけいいですか」

眠いんだから手短かに頼む。

「私が実行委員に入った理由ですけど」

僕の耳にはもうほとんど、糸井の声は入ってこなかった。ただ糸井の可愛らしい囁きが、小鳥のさえずりのように耳をかすめていくだけだ。

僕はそれを子守歌の代わりにしながら、少しずつ夢の中へと溶け出していった。糸井と一緒に過ごす、あのライブ会場を想像しながら。

寒風染み渡る冬の空が、賑わう地上を祝福するかのように照らしている。お腹が冷えてしまわぬように用意した紙包みに身を落ち着け、豚まんは大きな白い息を吐いた。彼の隣に座っているあんまんもまた、同じような白い息を吐き出している。豚まんはそつと、彼女に紙包みを渡してやった。

今日は豚まんとあんまんにとつてこの上なく幸せな日である。二人は今までこの日のために生きてきたようなものなのだ。二人は待ち望んだこの瞬間に微笑んだ。

どこかでピザまんが言った。

「今日は皆さま、彼らのためにお集まりくださりありがとうございます。この寒い中、すつかり冷えてしまったのではないのでしょうか。でも大丈夫ですよ、ほら、ちゃんと保温気がありますからね」

ピザまんは冗談が好きだ。あるのは保温気ではなく紙包みだけなのだから。豚まんは心の中で笑った。またピザまんが続けた。

「まあ私などの話を聞いているだけじゃつまらないでしょう。早速、メインイベントといきましょうか！ ケーキ入刀です！」

沸き起こる歓声の中、豚まんとあんまんは立ち上がった。カレーまんが運んできてくれたウェディングケーキの前に、二人で立つ。

そう、彼らは今日、三日間の交際（これはだいぶ長い）を経て結婚したのである。ナイフを持つ豚まんの手には、あんまんの、少し乾燥したきめ細かい肌触れた。

あまり時間はない。急かす気持ちを抑え、豚まんは、丸くて大きなケーキにそつと刃をあてがった。

ナイフがケーキに数ミリ食い込んだと思つたその時。どこかで大きな叫び声が聞こえた。

「人間だ！ 人間が来たぞ！ 海鮮まんがさらわれた！」

ナイフを持つ手が止まった。海鮮まんはあんまんの親友なのだ。あんまんの震えが豚まんの中身にまで伝わってくる。勇ましい気持ちで遠くを見やると、全身を緑色で覆った人間が大きな手で海鮮まんを握り、どこかへ連れていくところであった。

「やめろ！ 返せ！ おい待て！」

豚まんたちが呼び止めるのも虚しく、海鮮まんは緑色の人間はあつという間に彼方へと消えてしまった。

「どうしよう、海鮮ちゃん、食べられちゃう」

人間は凶悪で、何も悪いことなどないと言わんばかりに豚まんたちの仲間を食べるのだ。ちなみに、人間に捕まったら最後、帰って来られた者は一人もいない。しかしあんまんの怯えた表情に、豚まんの勇気が揺さぶられた。今日は幸せの日であるはずなのだ。それを人間に壊されてしまうわけにはいかない。

「安心して、あん。僕が行ってくる。僕が助けに行く」

「そんな、でもあなたが」

「大丈夫、君はここで待っていてね」

すり寄ってくるあんまんに紙包みを被せ、豚まんはナイフを持ったまま緑の人間を追った。ピザまんやカレーまん、他にも様々な悲鳴と怒号が聞こえたが、それらは豚まんをさらに後押しするだけだった。

2

豚まんが紙の包みから飛び出し、空中を舞う。緑色した人間は首筋に触れる熱気に驚きの声を上げた。同時にナイフが吹き飛び、勢いをつけて回転している。豚まんは跳ね飛ばされ、落下していく。その軌道はきつと地面へと向かうだろうことが周囲のものには見て取れた。人間は怒号を上げ、路上の饅頭売りを睨みつける。違うんです。店主は何事か判らぬうちに早くも謝り始めていた。

緑色の客は二重の意味で怒鳴っていたのであった。早速一口かじった海鮮まんに噛み切れない触感があった。すぐに何かの殻と思つた。しかし、舌触りから察するに、

それはポリエステルの破片であろうことが読み取れた。客は引き返して苦情を言おうと思った。その矢先に、饅頭が飛んできたのである。

店主はしきりに叩頭し、謝意を示すが、客は怒鳴り声を収めることがない。饅頭たちは店主の方から豚まんの方へと意識を戻す。

「だれか見て来いよ」一群の中から声が上がった。

そこで、ピザまんが台の端へとにじり寄った。そして、すぐに悲鳴交じりの大仰な声を出した。他の饅頭たちは顔色を変える。もう売り物にならないだろう。

豚まんは地面に落ちた衝撃で砕け散っていた。砂埃がかぶさり、すすけたように黒ずんでいる。中身は飛び出し、肉片が辺りに飛んでいる。一部は怒号を上げ続ける客の足に踏みにじられている。店主がそこへ頭を叩きつけているのだから、なおさら豚まんは潰されていく。顔に肉片をまとわりつかせたまま、涙声に謝罪を続ける店主の表情は笑いにも似ていた。

「豚が」客の怒声が響く。「てめえ、この野郎」

「へえ、豚でございます」店主は泣きわめいている。「申し訳ありませんでした」

丸々と肥った体を揺すりながら、店主は激しい失禁を抑えることが出来ずにいた。豚まんは尿にまみれ、臭気に覆われている。ついには海鮮まんまでもが地べたに叩きつけられ汚物と化した。ピザまんは哀憫の念を抑えきれずに、自らその仲間へと加わった。それを見ていた饅頭たちは続けざまに飛び降りていく。店主はついに糞尿をまき散らしながら客へすがりつく。客は叫び声を上げ、腰を脱がす。もはや、すべての人と物が糞便とともに混然一体と化し、一つの小宇宙を形成しつつあった。

激しい運動が尋常ではない熱量を生み、開關の刻を待ち受けていた。名状しがたい色彩を放ち、生命の根源となりつつあるのだ。いまここに我々は世界の誕生を見受けるのである。まさしくそれはダスマンへと頽落した現存在共の豚まんたちとのミットザインがエアアイクニスなわけであるから、もうダーザインの単なるレーベンならぬヴォーヌンクのウアシュプリングなのだ。その近きに住まうという仕方では我々はこの宇宙の開關の刻を見つめている。

たぎる宇宙がその特異な色彩を放っている傍ら、糞尿のサイバネティックなコンテクトの紡がれ方がザイエンデンのうちにヴァールハイトを映し出しつつある。さな

がらそれはモナドのごとき相貌である。世界の全体がイッヒハイトとのウンターシーデンに導かれ、独特の色の濃淡をもってそのパウエンデンな側面をフライハイトなエツフェンネンの中にインヴォルブされている。

新たな宇宙よ！

我々はこのにおいて生命の根源に触れ、驚異に満ちたゲハイムニスのウンハイムニスな部分をアーティフィシャルから引き離しつつあるのだ。我々は感動に充足し、この神秘のアントゲーエンを見守らん。すべてのレーベンがヘーベルの言うがごときエーテルのうちの植物となるのだ。そして我々は花開かんとするその華やぎの中にスプイェクトウムたろうとするポイエインの真実の活動を見ようと言うのである。

見よ！

そこなる生命に我々は神の息吹を感じている。生命の祝祭が今まさに始まろうとしている。熱量はもはや我々には高度のあまり清冽と誤解されてしまうほどだ。緑色を現している。店主は狂気的笑みを浮かべ、狂わしい色彩を帯びたその雲の中で燃えるような糞尿に身を焦がしている。豚まんの残骸は今や埃と変わらぬほどに砕け、これから生まれてくる生命へとゲノムを明け渡している。そこにこそテクニッシェなアルトツァイターの自由な連関を見出すべきなのだ。我々は今この宇宙のヴェーゼンを見する。

溶解するダーザインによって、我々は集立するディングを見つける。ペディングンされつつある一つの生命である。

今、一匹のアホドリが飛び立っていく。

3

しかし、彼は実は厳密にいうとアホドリではなかった。彼は「アホドリ」の名を冠する地球外生命体であり、地球上に存在する例のアホドリとは全く異なる有機物であったのだ。有機物といっても地球上にあまねく存在する有機物とは違い、その動力すらも全くもって異質のものであった。というのも、彼はかの一般的な有機物と

して知られているところのアホウドリとは異なり、水素を用いて超宇宙的な動力によって稼働していた。しかしその動力は地球上に存在しているエネルギーと比較しても微々たる運動量しか得られず、移動距離にして一日で僅か一センチにしか満たなかつた。これを一年になおすと、たつたの三六五センチであった。それでもアホウドリ——いや正確にはアホウドリに似た——外見はアホウドリに限りなく似ている——何かであるためここではとりあえずアホウドリと定義しておく——はその限りなく短い飛行距離のために飛び続けていた。アホウドリはなぜ飛び続けているのか——それはおそらくこの目が知っている。アホウドリは自らの目に、限りなく壮大な目的を映していた。しかしその目を覗いても、目的というのはあまりに濁っておりよくは見えない。実はこのアホウドリ、視力が良くないのだ。人間の視力に換算して、それはおよそ0.03。ほとんど見えていないのと同じだった。アホウドリの目には、光の集合体としてしか、外の景色を認識できていなかった。それでもアホウドリはその目に灯る光だけを頼りに、飛び続けているのだ。そこまで視力が悪いなら眼鏡——あるいはそれに準じた視力矯正用の何かを装着すべきである、と普通なら思うのかもしれない。しかしそんな思考——もしくは志向というべきかもしれない——はアホウドリにはなかった。なぜならアホウドリ——いや、アホウドリという名を冠するこの地球外生命体を含めた、すべての地球外生命体は、皆、等しくアホであったのである。アホと言つても、そこに蔑称としての意味は存在しない——もとい存在しえない。地球人が他人を貶める語として使用しているところのアホと言う言葉は、宇宙語としてはむしろ褒め言葉として機能していた。つまるところ、アホと言う言葉は、ほとんど見えていない目でなお飛び続けるその勇敢さをたたえて、使用されていたのだ。アホウドリは地球外生命体の共生圏において、勇敢なる戦士であった。アホウドリはその共生圏の中で確固たる地位を獲得していた。ちなみにアホウドリと同様の地位を獲得している存在として、アホの坂田が挙げられる。彼は地球外の共生圏において王として崇められていた。アホウドリはその坂田王国の国民として、極めて優秀な成績を収めていたのである。しかしアホウドリはこれ以上ない地位をすでに獲得していたのにもかかわらず、自らの使命にひたすら食欲であった。アホウドリはその光を求め、ただひたすらに——というよりもただひたむきに、飛び続けていたのである。飛び続けてい

ると、アホウドリは腹が減ってきていた。いくら地球外生命体とは言えども、アホウドリはれつきとした有機物であった。エネルギーを消費すればその分、補給する必要があるのだ。それはたとえ勇敢なる戦士たるアホであるところのアホウドリであったのだとしてもだ。アホウドリは何か食料を探していた。そしてアホウドリは、そこに見つけたのだ。豚まんたちと、緑色の人間たちとの、その一部始終を。

4

アホウドリは壮大な目的を達したのであった。

永久の飛翔、久遠の旅路の果てに。

タイムトラベル。

アホウドリは宇宙が誕生する、その瞬間にたどり着いたので。

光しか感じえぬアホウドリは、その嗅覚によつて宇宙の羊水の香りを嗅いだ。

それを人は糞尿と忌み嫌うであろう。

だが新たな宇宙は汚物から生命を得たのである。ならば忌避することはない。

——ぼくは帰ってきたんだ……

像を結ばぬアホウドリの瞳に、冷たい何か溢れ出す。

旧き宇宙に住まう人間は、それを涙と呼んだ。

零れ落ちる心のかげらが、アホウドリの目から濁りを洗い流した。

アホウドリは旧き宇宙を瞳に映す。そこでは醜い争いが繰り返られていた。緑の人が肥え太つた男を責め立てる。男はアホの坂田に似ていた。ここが新たな宇宙の聖地ならば、彼は旧き宇宙の殻を破つた英雄である。坂田王国を築くに足る存在と言えよう。

——ならばぼくはいつたい……？

アホウドリは生まれて初めて問いかけた。己へと。自分自身へと。

それは悠久の時を超えた勇者さえ戸惑わせる。

心の迷い。

アホウドリの迷いをよそに、争いは激しくなっていく。空飛ぶ豚まんは地に墜ち、新たな宇宙の羊水が大地に満ち、哀れなまんじゅうたちが自らの存在を否定する。開關の瞬間は近い。

小宇宙は静かに、しかし確実に熱を帯びていく。

アホウドリの瞳は人々の醜さを、ただ睥睨していた。

だが

「豚まんさん！」

叫び声。愛する者への届かぬ思い。

その声を聴覚で捉えた刹那、アホウドリの心が目覚めた。

——あん！

アホウドリは羽ばたく。大気を引き裂き、新たな宇宙から降り注ぐ流星のように。

闇を貫く一条の光。旧宇宙の人間たちは恐れをなして逃げ去った。

アホウドリとあんまんの間を拒むものはない。

——ぼくが、いや僕が求めていたエネルギー……それは君だ、あん！

帰って来たのだ。遙かな新宇宙を、無限の時を飛び越えて

君のもとに

アホウドリは思い出す。少し乾燥したきめ細かい肌の感触を。

ウエディングケーキを切る時に感じた、未来永劫に変わらぬ心を——

あん！ 君が好きだ！

アホウドリは舞い降りる。愛する者のかたわらへ……。

だがその時、アホウドリの羽ばたきに大気が震え、紙バックのジュースを落としていった。

新たなる宇宙の羊水に、未知のエネルギーが加わったのだ。

そして旧き宇宙は終わりを迎える。

新たなる宇宙よ！

見よ！

今、一匹のカジキマグロが、新たなる宇宙へ泳ぎ出す。

5

暗い海原を泳ぐカジキマグロ——便宜上「カジキマグロ」と呼ばれるもの——は、時折自身の意識の中に浮かび上がる泡に困惑しながらも目の前にある世界をその目で見つめていた。その泡は「記憶」と呼びうるものであったが、このカジキマグロにはそれを泡として認識しかなかった。

カジキマグロはその泡、記憶を、脳内に浮かび上がる像としてではなく、視覚的な映像として眺めることのできる存在だった。その在り方はもはや生物とは呼べないものであるかもしれない。だが、幸いにもカジキマグロは自身の在り方について疑問を持たずにいることができた。目の前にある世界を動き回り、目の前を漂う小さきものを捕食する。それだけが彼の満足感であり、その結果にたどり着くための過程や方法など、ソレにとつてどうでもよかった。

カジキマグロは、そのような——ともすれば海にのみ生きる生き物のように呼ばれてはいるものの、それは先の宇宙で既に滅んでしまった、つまりこの宇宙にはまだ生まれてすらいらない「人間」という種族による定義であり、この時点においてソレは海の外でも活動することが出来ていた。

後に自らの驕りによって宇宙変革の引き金を引いてしまった矮小なる種族が想起するような「生存を妨げる物質」など、まだこの世界にはない。そこは、このカジキマグロを始めとする少数の生物たちの楽園であった。

カジキマグロが見る「泡」には、数々のビジョンが現れた。大気を切り裂き、光のみによって世界を認識していたビジョンもあれば、現在の姿からは想像もつかないほど小さきものとして何か大きなモノによる捕食を警戒しながら狭い世界の中で生きていたビジョンもある。そして自身がその大きなモノ、つまり「人間」であったビジョ

ンも。カジキマグロは思う、光しか見えていなかったこの生物は、どのように生きていたのだろうか、と。何故なら今のカジキマグロには世界は色鮮やかなものであり、それが当たり前のものであるからである。ソレには海の中に潜っていても空に輝く星々の色を見分けられる程度の能力があった。

ソレが「人間」であった頃、ソレは宇宙に憧れていた。特に空に輝く月などはソレの心を捉えて離さなかった。ソレに限らず、当時の人類は皆、月に何らかの存在を幻視した。ウサギを見る者もいれば、カニの姿を見るものもあり、はたまた罪人の姿を見るものもいた。それは言うならば月に対する、人類単位で繰り返される永遠の片思い。ソレも月に想いを寄せているという点ではその他大勢の人間たちと大差ない存在であった。

カジキマグロはいつしか、「泡」に惹かれ始めた。

しかし「泡」は、ソレの望むタイムリングで現れるわけではなかったし、またソレが望む美しいビジョンのみを映し出すわけではなかった。

「泡」の中に現れるビジョンは凄惨な争いを映し出した。あるときにおいてソレは争いの中で命を落とした人間の一人であったらしい。また、陰惨な虐待のビジョンとその谷で深い穴に落とされるビジョンを映し出した。あるときにおいてソレは自らの子どもを殺して食らう存在であったらしい。世界の美しさを見ることを好む一方で、カジキマグロは自身が遠い過去において犯し続けた罪の姿を見せつけられるその生を、次第に倦み始めていた。

だがカジキマグロはあるとき囁きを聞いた。

「そんなに疎ましい生ならば捨ててしまえ。捨てられないのならば、この世界を壊せばいい」

その声はカジキマグロの深層に染み込むようであり、魅惑的なものに思えた。しかし同時に、そのようなことをしてしまえば自身が世界を、正しくはその美しさを認識できなくなる恐れがあると理解していた。だからカジキマグロは、その囁きを一度は拒んだ。その拒絶に応じるように囁きは繰り返す。

「ワタシはアナタの幸せを願っているのだ。アナタが幸せになれることを望んでいるのだ。それにはアナタが世界を書き換えるしかないのだ」

しかし、世界を書き換えるという行為にカジキマグロは恐怖を感じた。現在見ている均衡を自分で作ることは不可能だ。それを理解していたからこそその恐怖であった。

「案ずることはない。世界は本来多層的なものである。ミルフィーユのように折り重なるこの宇宙において、多少の改変などは何ら影響をもたらすものではない。言うならば、アナタが本来の目的を遂げるには、多少の変化は恐れずに世界の改変を続ける以外に道はないのだ。さあ、選択を——」

今度こそ、カジキマグロは囁きに対する抵抗を失った。

そしてカジキマグロは選択した。それを意識した瞬間に宇宙は一変していた。

カジキマグロは、全く別の生き物へと進化を遂げていた。

ソレは空を飛ぶことが出来た。海を泳ぐことが出来た。太陽の近くを飛んでもその体は解けることがなく、海深い所へ行ってもその体には何の圧力もかからなかった。

猪に衝突されても衝撃を感じることのない肉體、スライムに包まれても窒息することのない呼吸機能。ソレは、かつてその他多くの生物が幻視した、究極生物へと進化を遂げたのであった。

もはやソレにかつての感情などない。

愛したものを追い求めることも、夢見たものに手を伸ばすこともない。

ソレが求めるのは、もはや一つ。

「全てを凌駕し支配する」

それだけが、その生物にとつての願望と化していた。

そして、黙したまま移ろう歴史が究極の存在を生み出すと同時に、それを抑止する存在としての「勇者」もまた、世界のどこかで生まれようとしていた……。

そして、戦いの果てに。

世界は、滅亡した。

そして……。

「」で「終」[fn]「END」了」なんでもいいが、それをつければこの小説は終わる。だいたい創世神話的なお話は構造が大差ない。あえて現代物理学の見地から検討してみれば、理論物理学者がまじめに考えているマルチユニバースの考え方からこの小説で語られていることは説明可能と言えなくもない。現にある宇宙はわれわれの四次元宇宙も含んだ場で起きている無数のビックバンから帰結したひとつの宇宙にすぎない。つまりアホウドリ宇宙、カジキマグロ宇宙、その他の宇宙のどれもが偶然的に生成したにすぎない。この小説の作者に見られる「人間原理」の残滓みたいなものに嫌気がさす方もいらつしやるかもしれないがそこは我慢していただきたい。宇宙において知的生命体が発生する条件については、理論物理学者も頭を悩ませているが、そこはフィクションということでこれもご容赦いただきたい。

もう書くことがない。「火山」や「パティシエ」をお題にされたが、そんなことを言われたって困る。と仮に現在この文章を書いている存在を「あ」とするならば、その「あ」が存在している宇宙がまずなければならない。この入れ子構造の内部で行われている、「あ」と「あ」を認識している「い」の存在も考慮した場合、入れ子は更に増えていく、というより、この論理は無限後退していくので、これは偽だ。つまり現にあるものがあるのであって、このような想定につぐ想定による存在をまずやめなければならない。

だからこのようなありきたりのメタはメタではない。メタのポーズをした論理お遊びだ。では誰がどこでいつオチをつけるのか。ここでオチは既についているという発想を広義の決定論とみなすことができる。初期条件、つまり一文目が書かれたことによつて、その後の文章が決定される。だがニュートン力学の他に相対性理論、量子力学、素粒子物理学、ひも理論、超ひも理論、M理論、種々さまざまあるが、そこで記述されるような物質のふるまいが、小説が書かれている時、読まれている時にも、起こっているのではないかと、ここで理論をでつちあげること、つまり量子ゆらぎを

小説の読み書きで基礎づけること、そうすればあのソーカル事件の二の舞になることは目に見えている。

物理学から遠く離れて、ごく一部の学者が検討している「偏在転生説」でこの小説を説明することも可能だ(というより、小説に説明をつけるということは簡単なのだ)。豚まん、あんまん、ピザまん、アホウドリ、超越的存在、カジキマグロ、海鮮まん、これらすべての自我が一貫しているという意味で、「偏在転生説」との親和性がある。

と、先ほど「もう書くことがない」と書いたが、このようにでつちあげようとするばいくらでも書くことができる。情報が次の情報を喚起し(だがここですぐに次々に宇宙が誕生していることのアナロジーを読むべきではない。それはブーヴレスのいう「アナロジーの罠」にほかならない)、小説は終わることがない。ここで私の身分を明かしておこう(あらかじめ断っておくが、私が身分を明かすこと自体はプログラムされていたが、いつどこでということに関してはランダムだ)。私は小説生成プログラム。

本の旅

草津出

人目

林羽夢

制限された者の末路だ

賢く生きているのだと大人は言う

賢くなければ生きられないのだと大人は言う

なら私は生きられませんか

昔 良い子でしたから

憂鬱なため息を吐く朝でも

無数の目は蟻より働いている

ああ その生々しい光を向けなくてくれ

私は溶けてしまうのだ

真夏に食べる棒アイスのように

皮膚がただれ 汁が流れ

後に残るは棒のみだ

醜い焼け跡の付いたアタリ券だ

目はこれを狙っているに違いない

棒の周りに砂糖を付けて

今すぐ寒空に飛び込ませてくれ

作品の舞台となった土地を訪問する

風を頬に受け

感動を網膜に焼き付ける

本の上からなぞっていただけの文字の羅列が

僕の新たな記憶として再構成されていく

反抗期

林羽夢

鳴り響く電子音

カシャ カシャ カシャ

小さい大声の合唱

ヒソヒソヒソ ヒソヒソヒソ

俯いている彼らの眩き

「帰りたい」

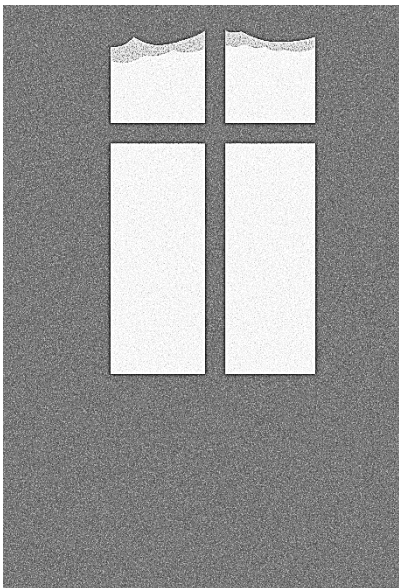
見よ これが大人だ

教育を受けた者の末路だ

喋るな 寝るな 遊ぶなと

いさな幸福を

(意識染しかった)



繰り返される詩の断片

rico

詰っているのか 詰られているのか
おくちがわるいときらわれる

回っているのか 回されているのか
くさったところはえぐりとして

切っているのか 切られているのか
だれがやってもけっかはおなじ

混じっているのか 混ぜられているのか
もうどこにもいけない

見ているのか 見られているのか
きずつけることがつみならば

わたしは

繰り返される生の断片

rico

いち、に、さん、し、くるっとまわってステップ
空に 祈る 唱声を 聞く

逆立ちの 世界が 楽しそうに 笑ってる

いち、に、さん、し、くるっとまわってジャンプ

——せつかく靴はそろっているのに 朝になっても帰
らない——

いち、に、さん、し、くるっとまわってスベッタ
真つ暗トンネル その先の 綺麗な川を 渡りましょ

いやなやつ

rico

ここじゃあ みんな だれもが そう

わがままで
勝手に

自慢ばかり

思いやりなんてありやしない

自由で

気ままで

遊んでばかり

あらしいの終わる日はこない

よのなか みんな いじわる だから
わたしだけは 優しくなくっちゃ っと思おうの

さみしいの

rico

あなたさみしくならないの？

彼女はきらきらの瞳をまんまるにして言う
変なこと聞くのね！

さみしいなんてわからないわ
彼女はやわらかな頬をふうふうにして言う
たまごにわたりの話があるでしょう？

わたしはこう考えるわ

たまごだけあつてもにわとりは生まれえないし
にわとりだけでもたまごは産まれないわ
でもにわとりがたまごを産むんでしょう？

たまごがないとにわとりは生まないじゃない
つまりわたしにとつてあなたはそういう存在だとい

こと

わたしがたまごならあなたはにわとりだということ
あなたさえいればわたしはさみしいなんてきつとずつ
としらないわ

彼女はさみしそうに

そして少し恥ずかしそうに

言ったのだった

詩

いち、に、さん、し、くるっとまわってステップ

著者紹介

星井 靄 (ほしい・あい) 無職。

草津出 (くさつ・いづる) 学生。東洋大学文学部日本文学文化学科二年。温泉好きが高じて念力でお湯を沸かせるようになった。眼鏡にはくもり止めが欠かせない。

八名井明 (やない・あきら) 学生。東洋大学社会学部社会心理学科二年。谷崎好きが高じて遂にサイン会を開催し盛況を呼ぶようになった。残念ながら眼鏡を掛けていない。

林羽夢 (はやし・はむ) 学生。東洋大学文学部哲学科二年。朔太郎好きが高じて薬物中毒になんてことにはなっていない。勿論眼鏡。

rico (りこ) 学生。東洋大学社会学部社会福祉学科二年。挿画担当。デジモン好きが高じて「デジモンワールド3」を五分でクリア出来るように。当然眼鏡。

伊番鑄市 (いばん・いりいち) スーパーグローバル学生。スーパーグローバル頭幼大学スーパーグローバル文学部スーパーグローバル哲学科スーパーグローバル惨年生。脱学校目指してテキストの葡萄畑の中で育ったニューカマー(嘘)。

修養は謙遜に始まります。謙遜は読書する人に特に大切な3つのことを教えます。

第一は、さげすみの心を抱かないこと、またそれを書き表さないこと。

第二は、いかなる者から学ぼうとも恥じないこと。

第三は、ひとたび学ぶことが身についたならば、いかなる者として見下さないことです。

——Hugh of Châteauneuf

新白山文学特別増刊号

発行 文藝サークル“綴”

印刷 共信印刷

2015年11月23日初版第1刷発行

<http://ttuduri.web.fc2.com/>

<http://ttuduri.blog.fc2.com/>

https://twitter.com/toyo_tuduri

ハッシュタグ #新白山文学 にて感想等お待ちしております。

bungei_ajo@hotmail.co.jp

挿画 rico

不許無断転載